

ISSN 2186-6198

(オンライン版) ISSN 2186-6201

言語文化教育

JATLaC Journal No. 8

通巻第8号

2013

JATLaC 言語文化教育学会

The Japan Association of Teaching Language and Culture

言語文化教育

JATLaC Journal No. 8

通巻第 8 号

(旧誌名：言語文化教育研究)

目 次

会員投稿論文	3 ~ 16
<u>統語における Bracketing paradox と複合動詞</u>		
中井 純 (フロリダ大学)		
理事投稿論文	17 ~ 32
<u>コピー理論について</u>		
生井 健一 (早稲田大学)		
第 13 回大会記録	33 ~ 45
《個人発表記録》		
中山 富子 (昭和女子大学大学院)	34-37
<u>コーパスに基づく補助動詞「～てしまう」の考察</u>		
<u>—意志動詞および無意志動詞との関わり</u>		
大橋 弘顕 (横浜国立大学)	38-41
<u>「正解」から、「つながり」の実現へ</u>		
<u>—必修リーディング・リスニングクラスでの試み</u>		
萩原 伸一郎	42-45
<u>「先」によって示される時に関するメタファー表現</u>		
		(発表順)
2013 年度活動記録	37 ~ 39
言語文化教育学会紹介	40 ~ 44
学会よりお知らせ	45 ~ 46

會員投稿論文

統語における Bracketing paradox と複合動詞

中井 純

フロリダ大学

0. 序

英語における PRO コントロールとは、空範疇の代名詞的照応形 PRO を不定詞節や動名詞節の主語の位置に設定するものである。そして、PRO の定理により、PRO は(1)のように音声的な要素が具現可能な位置に現れることが規定されている。

- (1) a. We hope to win.
b. We_i hope [PRO_i to win].

(1)では、we が PRO のコントローラーとなり、さらにその PRO は win から θ 役割を与えられる。Chomsky and Lasnik (1993)は、さらにこの PRO が他の名詞句同様に格を受け取り、それが Null Case という特殊な格であると主張している。

そして、この PRO コントロールの考え方は影山 (1993)、Aoshima (2001)などによる日本語の複合動詞の説明にも見られる。例えば、(2)のような場合である。

- (2) 私は_i[PRO_i宿題を復習し]終えた

注意しておきたいことは、可視性の条件 (Visibility Condition)¹を順守するためだけ、つまり「復習し」から θ 役割を付与される為だけに PRO は存在している、ということである。²

このようなコントロールに関して、Hornstein (1999) は θ 役割も他の統語的素性と同様の素性となると仮定することで、PRO を設定することなく、NP 移動に還元することができることを主張し、さらに Aoshima (2001)は、Hornstein (1999)のこの仮定が、日本語の複合動詞におけるコントロール構文にもあてはまるとした。本稿では、このような Aoshima (2001)の複合動詞のアプローチにおける問題点を指摘した後、コントロールとされる現象は、影山(1993)の θ 同定という考え方をを用いることで、PRO を設定せずに説明できると提案する。

1. 先行研究

1.1 Hornstein (1999)の英語におけるコントロールの分析

Hornstein (1999)は、英語のコントロールには、義務的コントロールと非義務的コントロールの 2 種類が存在し、なかでも義務的コントロールは PRO コントロールに対応するということを主張している。³

¹ 可視性の条件(Visibility Condition)は、項である名詞句が格を受け取っている場合のみ、 θ 役割を受け取ることができる、としている。

² Kageyama も Aoshima も PRO に関する Null Case の話は一切問題にしていない。そのため、本稿でも日本語における PRO の Null Case に関しては、話題にしない。

³ Hornstein (1999)では、義務的コントロールとは反対に、以下の様な例が非義務的コントロールの例だとしている。

- (3) a. John expects to win. (= Hornstein's (1))
 b. John expects [PRO to win].

Hornstein (1999)は、義務的コントロールには(4)のような特徴がみられると主張している。

- (4) a. PRO をコントロールする先行詞が必要であること。
 b. 先行詞と PRO の関係は局所的であること。
 c. 先行詞が PRO を c 統御すること。
 d. ゆるい同一性が 見られること。
 e. コントローラーが分離先行詞でも可能なこと。
 f. de se 解釈が可能なこと。
 g. only を伴う名詞句が、only を含めて先行詞になれること。

さらに、(5)のような仮定を立てることで、義務的コントロールは(6)のように NP 移動に還元できると主張している。

- (5) a. θ 役割は統語的な θ 素性である。
 b. 項は θ 役割を v または述部から受け取る。
 c. 連鎖は θ 役割をいくらかでも受け取ることができる。

- (6) a. Mary hopes to win. (= Hornstein's (45))
 b. [_{CP} [_{IP} Mary [_{VP} ~~Mary~~ hopes [_{CP} [_{TP} ~~Mary~~ to [_{VP} ~~Mary~~ win]]]]]]⁴

(6)において、*Mary* は、はじめ *win* と併合し θ 役割を得るが、EPP のために埋め込み節の TP⁵を経由し、さらには主節動詞の *hope* からも θ 役割を得て、最終的には主節の TP まで上昇している。このように Hornstein の分析では、PRO を使わず、名詞句が移動することによって連鎖が形成され、移動によって生じた痕跡は NP 痕跡とされる。このような移動は通常

- (i) a. It is believed that shaving is important. (= Hornstein's (29))
 b. It is believed that [pro shaving is important].

このような動名詞の主語となる位置は、スペイン語やイタリア語で用いられる *pro* とはその性格が異なる。というのも、通常、*pro* は(i)のように主格が付与される位置のみに出ることができる。

- (ii) *pro* palra.
 'He is speaking'

Hornstein では、ここで *pro* は動名詞節内の T が持つ素性を照合するためだけに挿入されており、さらに、Reuland (1983) などでは、この位置が *pro* ではなく、PRO だとしている。ここでは、PRO か *pro* かは特に問題にしない。

⁴ 本稿では、Radford (2009) に従い、痕跡をストライクスルーで示す。

⁵ Hornstein(1999)では、TP ではなく IP としているが、IP と TP は同一のものなので、本論文では TP にすべて統一しておく。

の分析では、 θ 基準⁶違反であるが、(5c)の仮定より、*Mary* が θ 役割を複数受け取ることができるので、可能な派生となるのである。

1.2 Aoshima (2001)の日本語におけるコントロールの分析

Aoshima (2001)では、日本語にみられる義務的コントロール構文は以下の3種類に限定され、それぞれが Hornstein の主張する(5)の特徴を満たすと主張している。

①. 複合動詞のパターン

(7) a. ジョンがその論文を読み忘れた。 (= Aoshima 's (1))

b. ジョンが i [[PRO_{*i*} その論文を読み] 忘れた。

他にも、損ねる、兼ねる、なおす、始める、終える、続ける、などを複合動詞の主要部として取るものは、このパターンになる。

②. 「て」または「で」を取るパターン

(8) a. ジョンはその論文を読んでみた。 (= Aoshima's (2))

b. ジョンは i [[PRO_{*i*} その論文を讀ん]で]みた。

他にも、みる、ほしい、くれる、もらうなどを複合動詞の主要部として取るものはこのパターンになる。

③. 「ように」を取るパターン

(9) a. ジョンがメアリーにその論文を読むように言った。 (= Aoshima's (3))

b. ジョンがメアリーに i [[PRO_{*i*} その論文を讀む]ように]言った。

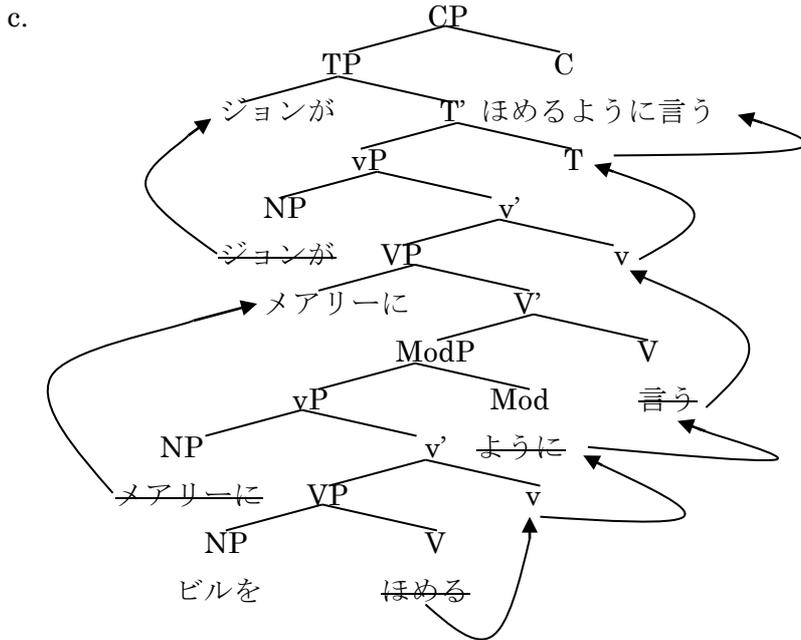
他にも、言う、頼む、命ずる、説得する、告げる、勧める、などを複合動詞の主要部としてとるものはこのパターンになる。

さらに、Aoshima は、Hornstein の主張するように、これらのコントロールは PRO ではなく、NP 移動に還元でき、従属節は vP の投射までを持つと考える。つまり、Aoshima の主張では(11a)のような文は(11b)ではなく、(11c)のような派生になる。

(11) a. ジョンがメアリーにビルをほめるように言った。

b. ジョンがメアリーに i [[PRO_{*i*} ビルをほめる]ように]言った。

⁶ θ 基準とは、Chomsky (1981)において提案された条件であり、各項が受け取ることのできる θ 役割はただ一つだけであるとしている。



本来の分析ならば、(11b)のように、「言った」の動作主は「ジョン」であり、「メアリー」は受取主（間接目的語）、「PRO ビルをほめるように」は命題の θ 役割を受け取るとされる。さらに、埋め込み文内の「ほめる」も θ 役割を発生し、その動作主の θ 役割を「ジョン」がコントロールしている PRO が受け取り、対象を「ビル」が受け取る。一方、Aoshima の分析によれば、(11c)からわかるように、「メアリー」は埋め込み文の「ほめる」から θ 役割を付与され、焦点素性のためにフェーズとなる vP の指定部に立ち寄りながら、最終的には「言った」の VP 指定部の位置まで上昇して、「言った」からも θ 役割を受け取る。また、埋め込み文の動詞である「ほめる」が主要部移動を起こして⁷、主節の C の部分にまで上昇する。

さらに、Aoshima は、束縛関係が成り立つのは、LF における同フェーズ内に限られる、という考えのもと、さまざまな束縛現象に原理的な説明が与えられるとしている。そして、Chomsky (1999) の考えを発展させ、(12)のような仮定を立てている。

- (12) フェーズの主要部が移動を起こして、痕跡となっている場合、そのフェーズは strong にならない。

(12)の条件のもとに、次の文とその構造を考えてみよう。

- (13) a. 自分自身を_iジョンが_iメアリーに_jt_{ij}ほめるように頼んだ。
 (= Aoshima's (83b))
 b. ほめるように頼んだのは、ジョンがメアリーに自分自身をだ。⁸
 (= Aoshima's (90))

⁷ Aoshima はこれを再構成(restructuring)だと言っているが、これは Rizzi(1986)の言う restructuring とはずいぶん異なる。なので、ここでは敢えてこの主要部移動を restructuring と呼ばない。

⁸ Aoshima は Koizumi (1995)に従い、これが「ほめるように頼んだ」で1つの構成素をなしている証明だとしている。

- (14) a. *ジョンが自分自身を_i メアリーに[CP トム が_i t_i ほめたと]言った。
 (= Aoshima's (91))
 b. *ジョンがメアリーにほめたと言ったのは、トムが自分自身をだ。
 (= Aoshima's (92))

(13a)において、「自分自身」は「ジョン」と「メアリー」の両方を指すことができる。これは「ほめるように頼んだ」では、(13c)が示すように、動詞が主要部移動を起こし、主節のCにまで上昇することによる。よって、コントロール節のvPと主節のvPはstrongフェーズでなくなり、vPに存在した「自分自身」の痕跡であるt_{ij}が「ジョン」と「メアリー」と同じフェーズに存在することになるからである。一方、(14a)には定形の補文標識「と」があり、動詞「ほめた」の主節動詞への移動を阻んでいる。よって、(14a)におけるt_iとその先行詞である「自分自身」の間にはフェーズが存在することになり、t_iが正しく束縛関係を構築できないことになってしまう。この理由により、(14a)は非文になると言う。さらにAoshimaは、(14b)の非文法性を、「ほめたと言った」における二つの動詞が複合動詞を形成していないことに帰している。⁹

2. Aoshima の分析における問題点

前節では、Aoshima (2001)の日本語コントロールの説明を概観したが、これよりその分析における問題点をいろいろな言語事実をもとに指摘する。Aoshimaは3つの複合動詞の形を同じようにとらえているが、②、③は①型とは異なった特徴を持つ。

はじめに、②型の「て」「で」型や③型の、「ように」型に設定される痕跡は音声的に具現するものと代替可能である、ということである。

(15) ③型 「ように」型

- a. ジョンがメアリーに_i[~~メアリーに~~自分自身を_i非難する]ように]頼んだ]。
 b. ジョンがメアリーに_i[彼女が_i自分自身を_i非難する]ように]頼んだ]。

(16) ②型 「て」「で」型

- a. ジョンは[~~ジョンは~~論文を_i読ん]で]ほしい。
 b. ジョンは[メアリーが論文を_i読ん]で]ほしい。¹⁰

⁹ しかし、「ほめたと言った」という表現自体には何もおかしいところがないので、それが原因で不適格文ができるというAoshimaの主張には問題があると言えよう。

¹⁰ 複合動詞の主要部が「みる」の場合、埋め込み文の主語位置に来るものは、「自分」だけである。

- (i) 私は [自分がその本を_i読んで]みた。
 (ii) #私は[ジョンがその本を_iよんで]みた。

これは、「みる」という動詞が、自分以外を埋め込み文の主語としてとれないという語用論的な制限を埋め込み文の主語に与えているからだと思われる。なお、この制限は英語でも同様に見られるものである。

- (iii) # I try for John to read my book.

しかし、以下の文からわかるように通常、痕跡は音声的に具現不可能である。よって、NP 移動による痕跡がそこに存在するとは考え難い。

- (17) a. What did you eat ~~what~~?
b. What did you eat it?

(15b)における「彼女が」は、再述代名詞と考えられるかもしれない。しかし、再述代名詞は、少なくとも英語においては、下接の条件¹¹や障壁を超えた移動の結果できた痕跡の代わりとしてのみ出現可能である。

- (18) a. the pie that I do not believe the claim that everybody hates the pie.
b. the pie_i that I do not believe the claim that everybody hates it_i.

- (19) *何をあなたは彼がそれを買ったという噂を聞きましたか

(18a)では、the pie が、痕跡の位置より下接の条件 (Complex NP constraint) を超えて抜き出されている。しかし、(18b)のように、この痕跡を再述代名詞の it に置き換えることで、文の文法性は増す。

一方、(19)は、日本語において下接の条件 (同じく Complex NP) を越えたスクランプリングの後に再述代名詞が出現している例である。しかし、(19)は非文法的である。これが示すことは、日本語に関する限り、障壁の有無にかかわらず、再述代名詞は存在しないということである。

しかしながら、Aoshima は、(15a)や(16a)に見られるように、NP-移動の分析を提案している。すなわち、(15a)では、「メアリーが」が、(16a)では、「ジョンが」が、それぞれ主節の間接目的語および主節の主語の位置まで上昇すると言うのである。だが、前述の通り、日本語には再述代名詞はないので、音声形態を持つ「彼女が」および「メアリーが」が従属節に現れるということは、(15)、(16)には NP 移動が関与していないということであろう。

次に、Aoshima は(15a)の「自分自身」が「ジョン」も「メアリー」も指せることから、「自分自身」の統率範囲は主節であると主張する(Aoshima 2001:15)。しかしながら、(20)に見られるように、(15a)における「自分自身」を代名詞表現である「彼を」に変えてみても、その適格性は保たれる。しかし、Aoshima が正しければ、「彼を」は統率範囲内で束縛されることになり、束縛理論の Condition B に違反するのだから、本来非文ができて然るべきである。

これに関しては、Radford (1988:357) でも触れられている。

¹¹ 下接の条件によると、英語では境界節点が NP と TP であり、NP か TP それぞれを2つ以上超えて移動することは禁止されている。例えば、(18)の例文においては the pie は、以下のように TP を同時に二つ飛び越えていることになり、それが(18)の非文性である。

- (18) a. the pie that_{[TP I do not believe the claim that [TP everybody hates the pie]]}

(20) ジョンがメアリーに i [PRO $_i$ 彼を非難する]ように]頼んだ]。

つまり、Aoshima に従うと、代名詞の時は統率範囲が従属節で、照応形の時は主節だということになり、統率範囲がアドホックなものになってしまう。この事実も Aoshima の説明が成り立たない事を示唆する。

次に、「束縛理論は LF において同じフェーズ内でのみ成立する」という仮説にも問題があると思われる。実際には次に示すように、束縛関係はフェーズの主要部が痕跡でないにも関わらず、そのフェーズを超えた束縛関係が可能なのである。

- (21) a. I like myself.
b. I $_i$ [$_{vP}$ like myself $_i$].

(21)では、myself と I が異なるフェーズに存在しているため、Aoshima の主張が正しければ、(21)は非文法的になるはずが、この文は完全に文法的である。よって、Aoshima の主張は正しくない。

最後に、Aoshima は、コントロール節に対応する節は TP ではなく、vP であるとする。その際、VP と主張する Wurmbrand (1998)の分析を批判している。自ら分析の根拠として、Aoshima は Akiyama (1998)に従い、否定対極表現 (NPI) が LF で NegP の指定部に上昇し、否定辞をライセンスすると主張している。(22)を見てみよう。

(22) *僕は[CP [TP ジョンが何も食べる]と]思わなかった。(Aoshima's (29))

(22)では、Chomsky (1995)の最小性条件に従い、より主節に近い「ジョンが」のために「何も」が主節の NegP の指定部にまで上昇できない。Aoshima は、これが(21)の非文法性の原因だと言う。対照的に、コントロール節を vP だと仮定し、さらに Johnson (1991), Koizumi (1993, 1995) に従って、「何も」が vP の指定部で対格を付与されると仮定すれば、以下の文章は「何も」が最小性条件に違反せずに NegP の指定部まで上昇することが可能であると Aoshima は主張する。

(23) ジョンは i [[PRO $_i$ 何も飲ん]で]みなかった。(= Aoshima's (31b))

ここでは、「何も」は vP の指定部 (outer Spec) にいて、また PRO (厳密には John の痕跡) も vP の指定部 (inner Spec) に存在する。そのため、両者は等距離(equidistant)にあることになり、否定対極表現の「何も」は、NegP の指定部へ上昇することが可能であるという。

しかし、Aoshima のいう分析には大きな問題点がある。最小条件で 上昇することの対象になる句は、素性照合に関して必ず同じ素性を持つものであり、Aoshima の言うように NP ならず何でも上昇する可能性があるわけではない。例えば、以下の文章(24)で CP の指定

部に上昇する可能性を持つものは、wh の素性を持った what のみである。

(24) what did you buy ~~what~~?

もしすべての NP が上昇する可能性を持つのであれば、CP の指定部に最も近い you が wh 素性の照合の候補ということになり、(25)が派生されて然るべきである。

(25) *you did ~~you~~ buy what?

しかし、(25)は非文である。つまり、「コントロール節=vP」という分析のサポートとして、Aoshima が提示している NPI に関する主張は、成立しないということになる。

3. 代案

ここでは、Aoshima(2001)において説明されてきた複合動詞における分析が、影山(1993)の θ 同定という考え方を発展させることで、PRO に頼ることなく説明できると主張する。また、この考えは英語にも応用できることを最後に概説する。Aoshima は複合動詞に関して、特に種類分けをしていなかったが、影山は、複合動詞には語彙的複合動詞と統語的複合動詞の2種類があると主張している。これは、(26)のように統語的複合動詞の場合、「そうす」を複合動詞句内に代入することが出来ることや、(27)のように「お～になる」の形で複合動詞句内に現れるという事実による。

(26) a. 太郎がまだ走っているのを見て、次郎もそうし続けた。 (=影山(8))
b. *太郎がまだ遊び暮らしているのを見て、次郎もそうし暮らした。 (=影山(7))

(27) a. ノートに書き込む – *ノートにお書きになり込む。 (=影山(15))
b. 歌い始める – お歌いになりはじめる。 (=影山(15))

つまり、複合動詞には(a)のように語彙の中で形成される複合動詞と(b)のように統語の中で形成される複合動詞が存在するということである。

ここでは、影山の主張に基づき、複合動詞には、語彙的複合動詞と統語的複合動詞の2種類があるとする。また、説明の都合上、複合動詞において、先行する動詞を V1、後続する動詞を V2 とする。

3.1 日本語における複合動詞と θ 付与

語彙的複合動詞の場合、V1 はどのような動詞とでも複合可能というわけではない。例えば、「走り去る」とは言えるが、「走り思う」は複合動詞として存在しない。これは、後続する動詞と θ 役割が一致しているもののみと複合が可能である、という制約があるからである。こ

の一致した θ 役割は一つに集約されるが、これを影山は θ 同定(identification)と呼ぶ。たとえば、(28)では、V1 と V2 において、外項の AGT が一致しているため、複合可能であるが、(29)では、同一でないので複合不可となる。

(28) 「走り去る」

走る V1 < AGT1 >
去る V2 < AGT2, < TH2 >>
走り去る V < AGT2, < TH2 >>

(29) 「走り思う」

走る V1 < AGT, < TH1 >>
思う V2 < EXP >
走り思う = 同定失敗

つまり、複合動詞が1つにまとまって、1セットの θ 役割を与える事になる。そのため、語彙複合動詞の場合、単独の動詞が出来上がるため、PRO は必要ない。

(30) 子供が母親に抱きついた。
子供が 母親に 抱きついた。
AGT GOAL V

抱く < AGT, TH1 >
つく < AGT, GOAL >
抱きつく < AGT, GOAL >

影山は一方、統語的複合動詞の場合、このような θ 同定は行われないと主張している。というのも、「食べつける」や「出し忘れる」は、V1 と V2 の θ 役割が違うにも関わらず、複合可能だからである。

(31) 出し忘れる

出す < AGT, TH >
忘れる < EXP, TH >

(32) 食べつける

食べ < AGT, TH >
つける < EXP, TH >

「出し忘れる」や「食べつける」などのように命令形にできないことから、「忘れる」および

「つける」の外項は経験主であると影山は主張する。(影山 1991: 143)

しかしながら、影山の説明に問題がないという訳ではない。統語的複合動詞においても、 θ 役割が V1 と V2 から、別々に出されているというわけでないことを示唆する例がある。以下の文章を見てみよう。

- (33) a. 電車が動き出す。
b. 電車が $_i$ [PRO $_i$ 動き]出す。

- (34) a. 電車が動く
b. *電車が出す。

影山(1993)は、「動き出す」を統語的複合動詞と捉える。そのため、構造分析は(33b)のようになる。すなわち、「電車」は「出す」から θ 役割を受け取り、電車がコントローラーとなっている PRO は「動く」から θ 役割を付与される。しかし、(34b)が示す通り、「出す」とは、本来意思を持って行う動作であり、主語は生物でなければならない。そのため、無生物の「電車」は AGT に関する意味的制約のために、「出す」の主語にはなれないのである。これが意味することは、「動く」と「出す」が組み合わさることにより、「出す」が持つ AGT は消え、「電車」は複合動詞「動き出す」から θ 役割を受け取るということである。つまり、統語的複合動詞においても、V1 と V2 がそれぞれ独立して θ 役割を付与している訳ではないのである。

しかしながら、(26)のように、「そうす」が複合動詞句内に代入可能なことや、(27)のように、「お～になる」の形が複合動詞句内に現れるという事実があるので、統語的複合動詞も語彙的複合動詞と同じように、レキシコン内で生成されるものとは言い難い。よって、前者は統語的に V1 と V2 が離れている必要があるのだが、意味的には複合していると分析しなければならない。

- (35) a. 統語
[IP 電車が [VP [動き]出す]

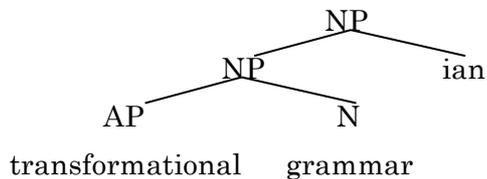
- (36) b. 意味
[IP 電車が [VP 動き出す]

ちなみに、このように統語と意味において異なった分析を強いられるということは、何ら特別なことではない。この種のパラドックスは、**bracketing paradox** としてよく知られたものである。例えば、Napoli (1996)は、形態と意味の間に見られる **bracketing paradox** として、以下のような例を示している。

- (37) a. transformational grammarian

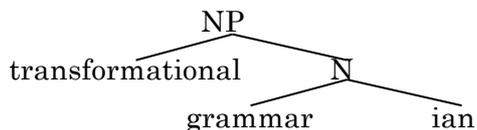
(37)は、「変形文法を学ぶ人」という意味なので、それを反映した構造分析は以下のようになる。

(37) b.



しかし、形態論の点からいえば、形態素の *ian* は派生形態素であるので、名詞の主要部を修飾するはずである。よって、形態論の観点からすると、以下のような分析になる。

(37) c.



このように、形態と意味で異なる分析が導かれることになるのだが、これと同様の問題が統語と意味の間において存在しても、何ら不思議ではないのである。

まとめると、統語的複合動詞においても、主語は1つの θ -役割しか受け取らないので、NP-移動を介して2つの θ -役割 (θ -素性)を受け取るとする Aoshima の分析は、誤りと言わざるを得ず、影山の θ 同定という考え方をを用いることで、複合動詞の分析をうまく行うことができる。しかしながら、影山の説明には派生と統語の間に *paradox* が存在するということを認めなければいけない。

3.2 英語における複合動詞と θ 付与

ここまで、日本語における複合動詞の意味的構造と統語的構造についてみてきた。最後に、英語においても、下記のような不定詞が使用された文などにおいて、動詞が複合して θ 役割を与えると考えられる文が存在することを主張する。以下の文を見てみよう。

(38) a. I want to know my name.

b. I_i want [PRO_i to know my name].

通常分析では、(38b)のように、*want*が *I*に 動作主の θ 役割を付与し、埋め込み文である *PRO to know my name* 全体に命題の θ 役割を与える。一方、埋め込み文内では、*know*が *PRO*に動作主の θ 役割を付与し、*my name*は主題の θ 役割を受け取る。しかし、このよう

な従来の分析では、以下のような文章の非文性が説明できない。

- (39) a. Simpson knows that the price of anchovies has gone up five cents on the pounds.
b.*Simpson wants to know that the price of anchovies has gone up five cents on the pounds.
(= Baker (1968)(ただし、例文は Nakada (1983:78) より))

(39a)において、*know* は経験者の θ 役割を *Simpson* に付与し、そして命題の θ 役割を埋め込み文の *that* 節に付与する。一方、埋め込み文では、*go* が *the price of anchovies* に主題の θ 役割を与える。このように、すべての θ 役割は適切に付与され、文は適格である。しかしながら、動詞を *know* から *wants to know* に変えてみると、(38b)のように、文は不適格となる。これは、*want to know* が1つの複合動詞として、事実を示唆する命題を取ることができないこと、つまり *want to know* の意味選択が *that* 節の意味内容と適合しないことに起因していると思われる。

一方、従来の分析では、(39b)の非文性は説明できない。というのも、*want* は *that* 節に θ 役割を付与しないので、それに関わる意味選択には関与しないし、また、*know* が単独で *that* 節に θ 役割を与えているのなら、(39a)が示す通り、意味選択上の問題はないはずだからである。よって、意味選択の観点からすると、*want to know* が1つの複合動詞となっているのは明らかである。したがって、統語における構造分析と、意味における構造分析はそれぞれ以下のようなになる。

- (40) a. 統語
[_{IP} Simpson [_{VP} [[wants] to know] your name]].
b. 意味
[_{IP} Simpson [_{VP} wants to know] your name]

4. 結論

本稿では、日本語において、従来コントロール構文と考えられてきた複合動詞は、影山 (1993)で提案されているような θ 同定を統語的複合動詞でも語彙的複合動詞と同様に働くと考えることで、PROに頼らずに説明できるということを見た。このように考えることで、意味的な構造と統語的な構造は異なるということになるが、そのような現象は言語的な分析において、*bracketing paradox* として、あり得る現象である。

また、このような複合動詞に関する分析は英語に関しても観察されるものであり、主に不定詞などの構文において、V1とV2動詞が複合して θ 役割の新たなセットが生み出され、付与されているのである。よって、この事実を捉えられないという点において、コントロール構文に対する Aoshima の NP 移動分析は、根拠がないものと結論付けなければならない。

References

- Akiyama, Masahiro. 1998. L-relatedness of the negative marker *na* and negative polarity items in Japanese. *The Rising Generation* CXLIV, 426-483.
- Aoshima, Sachiko. 2001. Mono-clausality in Japanese obligatory Control Constructions. College park, MD: University of Maryland at college Park General Paper Ling 895.
- Baker, Leroy. 1968. Indirect Questions in English. Urbana, IL: University of Illinois at Urbana Champagne dissertation.
- Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht, Holland: Foris Publications.
- Chomsky, Noam. 1995. *The Minimalist Program*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 1999. Derivation by phrase. *The MIT Occasional papers in Linguistics* 18.
- Chomsky, Noam & Howard Lasnik. 1993. The theory of principles and parameters. Reprinted in Noam Chomsky. 1995. The minimalist program. 13-127. Cambridge, MA: MIT Press.
- Hornstein, Nobert. 1999. Movement and control. *Linguistics Inquiry* 30, 69-96.
- Johnson, Kyle. 1991. Object positions. *Natural Languages and Linguistics Theory* 9, 577-636.
- 影山太郎. 1993. 文法と語形成. 東京: ひつじ書房.
- Koizumi, Masatoshi. 1993. Object agreement phrases and the split VP Hypothesis. *Papers on Case and Agreement I*, ed. by J D Bobaljik and C. Phillips, *MIT Working Papers in Linguistics* 18: 99-148.
- Koizumi, Masatoshi. 1995. Phrase structure in minimalist syntax. Cambridge, MA: MIT dissertation.
- Nakada, Seichi. 1983. *Aspect of Interrogative Structure: A case study from English and Japanese*. Tokyo: Kaitakusha.
- Napoli, Jo Donna. 1996. *Linguistics*. Oxford, NY: Oxford University Press.
- Radford, Andrew. 1988. *Transformational Grammar: A First Course*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Radford, Andrew. 2009. *An Introduction to English Sentence Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Reuland, J Eric. 1983. Governing –ing. *Linguistic Inquiry* 14: 101-136.
- Rizzi, Luigi. 1982. *Issues in Italian Syntax*. Dordrecht, Holland: Foris Publications.
- Wurmbrand, Susanne. 1998. Infinitives. Cambridge, MA: MIT dissertation.

理事投稿論文

コピー理論について

生井 健一

早稲田大学

1. はじめに

痕跡を、移動する語句のコピーとして捉えるコピー理論 (Chomsky 1993) は、今や生成文法の分野では標準となっている。その証拠に、Radford (2009) (以降 R) のような入門書でも、コピー理論をもとに様々な推論が展開されている。本稿は、コピー理論に関する疑問点およびそれをもとに書かれた R の説明に散見される齟齬を指摘し、改訂の必要性を示すものである。

2. コピー理論

最初に、R によるコピー理論を概観しよう。以下の例を検討されたい。

(1) (= R's (15), p. 86)

He could have helped her, or [she have helped him].

ポイントは、2つ目の節における助動詞が *have* であり、*has* や *had* でない点である。原形が現れるのは、そこに助動詞 *could* が隠れている (専門的には ellipsis の一種である gapping を受けている) からと言われており、その証拠として、R は以下の例を挙げる。

(2) (= R の(18), p.88)

*He could have helped her, or she've helped him.

もし、*she* と *have* の間に何もないのであれば、*she've* のような縮約が可能であるべきだが、(2)では許されない。しかし、そこに *could* が隠れているとなれば、それも当然のこととなる。最近の生成文法では、これを「delete された (すなわち、音声形態を持たない) *could*」とし、R は ~~*could*~~ と表す (deletion に関しては、(6)、(7)の説明参照)。よって、統語上、(1)の構造は(3)のように表記される。

(3) He could have helped her, or she ~~*could*~~ have helped him.

(3)を見れば *she* と *have* が縮約を起こさないのは、間にある ~~*could*~~ がそれを阻むから、ということが明白だろう。

さて、音声素性を消された ~~*could*~~ だが、これは (delete された) *could* のコピーと言われる。なぜ「コピー」という用語が使われるかという、いかなる文においても、それを構成する語はいずれもレキシコンからコピーという形で抽出されると考えられているからである。コ

3. 疑問点

1980年代後半になると、派生の途中で新たな（人工）要素を仮定して理論を構築する傾向に拍車がかかった。これを改めるため、チョムスキー（Chomsky 1993、以降 CH）はミニマリスト・プログラムを始めたのだが、結果、痕跡（trace）も人工的な産物と捉えられ、代わりにコピー理論が提唱されるようになった。これは、人間言語の構造を、数学的なつじつま合わせではなく、生物学の観点から研究しようという生成文法の基本理念に沿った改訂の試みと言えよう。しかし、（R も採用した）コピー理論そのものにはあまりにも難点が多い。以下にその具体例を示し、改善の余地を明らかにしたい。

3.1. 主要部移動とその解釈

真偽疑問文(5)の統語構造とされる(6) *will you will marry me* を検討してみよう。オリジナルコピーが消去された(7)が発音部門 PF に送られるため、話者が実際に発音する際には、*will* は1つしか認識（つまり、発音）されない。しかし、意味解釈がなされる LF では、音声素性は関与しないので、(6)がそのまま送り込まれるのと変わりはない。とはいえ、「単文には1つの法助動詞しか出現しない」という原則からすると、解釈を受けるのは2つの *will* のうち、一方のみと考えるのが妥当である。（両方がともに解釈された場合、(5)の疑問文がどんな意味になるのか検討もつかない。）では、どちらが解釈を受けるのだろうか。

もし、オリジナルコピーのほうが解釈されるのだとすれば、平叙文である(10)との区別がつかなくなる。

(10) You will marry me.

疑問文である(5)の場合、「たとえ文頭の *will* 自体は解釈を受けないにしても、それが付随する補文標識（complementizer）内には、発音されない疑問素性が存在し、そのため疑問文としての解釈が可能になる」との意見があるかもしれない²。しかし、疑問素性の存在が何らかの形で表層に反映されないかぎり、(10)と区別することは事実上不可能であろう。さら

² まず、R による以下の説明を参照されたい。

- (i) (= R の(42a,b), p. 97)
 a. We didn't know [*if* he had resigned].
 b. We didn't know [*that* he had resigned].

… it is plausible to suppose that the force of the clause is determined by a force feature carried by the italicized complementizer introducing the clause: in other words, the bracketed clause is interrogative in force in [(ia)] because it is introduced by the interrogative complementizer *if*, and is declarative in force in [(ib)] because it is introduced by the declarative complementizer *that* (ibid.).

R は、補文標識には音声素性を持たないものもあるとし、これらを *that* や \emptyset で表している。注意すべき点は、これらも ellipsis 同様、発音されないだけで、統語上は発音される補文標識と全く同じ役割を果たすということである。つまり、発音されない疑問補文標識 \emptyset も存在し、これは疑問素性（interrogative force feature）を持つとされているのである。

に、この補文標識が疑問素性によってイントネーションに影響し、それが(6)を疑問文と解釈するシグナルになったとしても、その疑問文は「問い返し疑問文」(echo question)と同等となり、結局無標の疑問文とは解釈されない。以下の(11)は、この分析をもとにした(6)のLF構造である。文頭の *will* は意味を持たない「ダミー」なので消えている。 \emptyset_{int} は、音声素性を持たない疑問補文標識(詳しくは、(23)に関する説明および脚注2参照)。矢印は、それに伴う上昇調のイントネーションを表す。

(11) \emptyset_{int} you will marry me?↗

では、文頭の *will* のほうが解釈されるのであろうか。(5)の *Will you marry me?* は、間接話法では、以下のようになる。

(12) I wonder [if you will marry me].

生成文法において、*if you will marry me* と *Will you will marry me?* はともに同じ意味を持つ真偽疑問文と捉えられるが、前者の場合、*will* は移動していないので、元々の位置で解釈されるしかない³。となると、*if you will marry me* と *Will you will marry me?* が同じ意味を持つかぎり、後者においても、やはり(音声素性が消された)オリジナルコピーのほうが解釈されると考えるのが自然であろう。

それではなぜ、*will* は文頭に移動するのだろうか。すなわち、文頭の *will* の役割は何であろう。「*if* の代わり」という答えがすぐに思いつくかもしれない。つまり、「*if* と同じ解釈を受ける」ということだ。しかし、*if* という語が存在する以上、なぜそれを使わないのか、という疑問が生じる。事実、「移動は併合よりコストがかかる(Chomsky 1998)」という規定があるので、*if* の併合を差し置いて *will* を移動させることは、経済性を重視するミニマリスト・プログラムの精神とは相容れないのだ⁴。

³ しかし、*if you will marry me* は独立文としては使えない。この疑問節が本当に *Will you marry me?* と同じ意味を持つのなら、本来使えて然るべきであるが、統語上何らかの問題があるのだろう。だが筆者は、この問いに対する納得がいく説明を読んだことがない。

⁴ CH は、*numeration* という概念を使って、*if* の併合と *will* の移動の違いを、以下のように説明する。いかなる文を作るにも、まず、必要となる語彙要素をレキシコンから抜き出して並べるのだが、こうしてできる語彙セットが *numeration* と呼ばれるものである。もし、*Will you marry me?* という文を作るのであれば、(i) $\{\emptyset_{\text{int}}, \text{you}, \text{will}, \text{marry}, \text{me}\}$ が *numeration* となる。そしてこの中の語彙項目を組み合わせ、目的の文を派生させるのだ。

同様に、*if you will marry me* という構造を作るのなら、(ii) $\{\emptyset_{\text{int}}, \text{if}, \text{you}, \text{will}, \text{marry}, \text{me}\}$ という *numeration* から派生が始まることになる。(ii)には *if* があるので、*will* は移動しない。つまり、*if* の存在が *will* の移動を阻むことになるのだ。その理由は以下のとおり。*will* を移動させるには、まず *will* のコピーを作成し、次にそれを文頭の \emptyset_{int} に付加するという2つの作業が必要となる。一方、*if* を使えば、そのまま \emptyset_{int} に付加すればよいだけなので、コピー作成の分だけ作業が1つ減ることになる。よって、こちらのほうが、より「経済的」であり、ゆえに優先されるというわけだ。

しかし、コピーを作る作業は、レキシコンから *numeration* を作成する時点でも行われるのだから、(ii)の *numeration* を導く際に、レキシコンにおいて、*if* のコピーの作成という作業も発生しているはずである。よって、全体的に見れば、どちらも同じコストがかかっていると言えるのではなかろうか。

さらに *will* が *wh* 句と共起する場合を検討すると、「*if*の代わり」という分析自体にも無理があることがわかる。(13)を参照されたい。

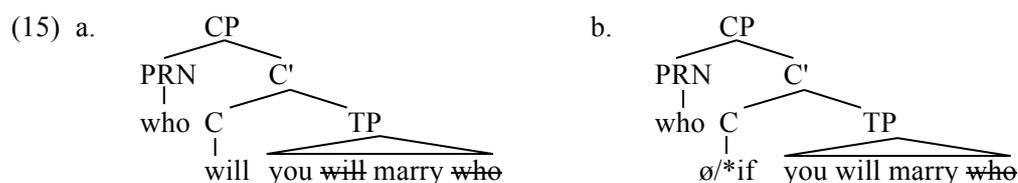
- (13) a. Who will you marry?
b. I wonder [who you will marry].

(13a)において、*will* が *if* の (意味・統語的な) 役割を果たすために移動しているのなら、なぜ(13b)では、間接疑問であるにもかかわらず、*who* と *you* の間に *if* が現れないのか。これは、従来、「Doubly Filled Comp Filter (Chomsky and Lasnik 1977)に触れるから」と説明されてきたが、R はこれを Complementizer Condition (補文標識条件) という形に翻訳して採用している。

(14) Complementizer Condition

An overt complementizer (like *that/for/if*) cannot have an overt specifier in the superficial structure of a sentence.

(14)は、「Cの指定部 (specifier) が *what* のような音声素性を持つ要素によって占められる場合、*if* のような音声素性を持つ補文標識はCの位置に現れることができない」という (説明ではなく) 規定である。つまり、発音されなければ、*if* に相当する補文標識はあってもよく、実際に「ある」とされている ((15b)の \emptyset がそれだ)。しかしながら、*will* が補文標識 *if* の役割をするのなら、(13a)の *will* も補文標識とみなされるべきで、この文も(14)に抵触して非文になるべきであろう。事実、この *will* は移動後Cの位置を占めるとされるので、構造上、*if* が現れたケースと何ら変わりがない。この点に関して、(15a,b)が同一構造となっていることに注目されたい。



また、CH は \emptyset_{Int} という抽象的な要素をCの位置に置くが (e.g. Chomsky 1995)、では、*if* は独立した (疑問) 補文標識ではないということなのか。発音されない疑問補文標識の存在はすでに見たが、(5)における \emptyset_{Int} をRは「接辞的 (affixal)」であるとし、それゆえ、きちんと発音されるホストを必要とする、という説明をしている (p. 122)。しかし、I don't know [what \emptyset you like]のような間接疑問の場合、従属節の疑問補文標識は、ホストなしで存在している。ということは、ホストを必要とする疑問補文標識とそうでないものの両方が存在するということなのか。もし答えが *yes* で、これがSAI (subject-auxiliary inversion)の有無の説明でもあったら、実にアドホックではないだろうか。(さらに、心理的実在性という観点からして、 \emptyset_{Int} などというものが本当にレキシコンにリストされているのかも疑問である。)

説明的妥当性 (explanatory adequacy) をも達成する理論を構築するには、いずれもきちんとした解答を用意しなければならない問いであるが、Radford 2009にもChomsky 1993にも納得のいく答えは見つからない。紙幅の都合上、ここではこの事実の指摘にとどめておく。

ところが、(15a)の（移動後の）*will*はCの位置で発音されるというのに、(14)に抵触しないのだ。となると、「*will*が補文標識の役割を果たしている」という解釈はやはり困難であろう。（あるいは、*will*の着地点が違っているのかもしれない。）

このように、*if you will marry me*と*Will you ~~will~~ marry me?*が同じ意味を持つという前提のもとでは、(5)における文頭の*will*の統語上の役割（つまり、なぜ移動するのか）およびその意味が全く特定できない。すなわち、オリジナルコピーではなく、移動した*will*が解釈を受けるという分析には、直接的な証拠は何も存在しないのである。

以上のように、複数の独立したコピーを提唱するコピー理論では、どうしても移動現象を正しく説明することができない。

移動をコピー理論で捉えてしまうと、さらに以下の問題も持ち上がる。上に「単文には1つの法助動詞しか出現しない」と書いたが、厳密に言えば、これは統語論上の制約であり、意味論上のものではない。事実、(16)と(17)の意味（つまり*will*と*can*の意味）を併せ持つ(18)のような文は可能である。

(16) You will speak English.

(17) You can speak English.

(18) You will be able to speak English.

しかし、(19)が示すように、*will*と*can*は統語制約上、共起できない。

(19) *You will can speak English.

ちなみに、「新たなコピーを作り、それを併合する」というコピー理論ではなく、実際に語彙項目を動かすという従来の移動操作であれば、例えば、(17)からは、(21)ではなく、(20)の真偽疑問文しか派生できないことが無理なく説明できる。

(20) Can you t speak English?



(21) *Will you can speak English?

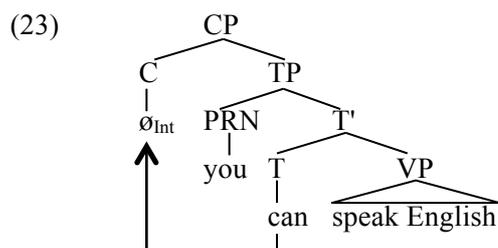
(20)は単文なので、そもそも2つの法助動詞は共起できないのだが、矢印が示すように「助動詞の移動」によって疑問文ができるとすれば、文頭のCの位置に*will*を入れてしまうと、*can*が移動できなくなり、(21)は疑問文ではなくなってしまう。もちろん、単文には1つの法助動詞しか出現できないのだから、(21)は叙述文としてもアウトである。

翻って、コピー理論はどうであろうか。まず、「単文にはひとつの法助動詞しか許されない」という制約は、最初から存在しないと考えなければならない。そうでなければ、(6)のような構造はそもそも不可能であろう。(6)を以下に(22)として再録する。

(22) will you will marry me

となると、直ちに問題となるのが、(21)の派生である。TP である *you can speak English* を作ったのち、(その場で *can* のコピーを作り、文頭に併合するのではなく) レキシコン (厳密には numeration : 脚注 4 参照) から新たな助動詞 *will* (のコピー) を抜き出し、これを併合してみる。すると非文(21)が派生されてしまうのだ。この文は、意味 (= (18)) の上では何の問題もないので、このような派生を可能にしてしまうコピー理論自体に不具合があることになるだろう。

R によると、(20)において、文頭での法助動詞の併合が要求される理由は、この文の主要部 C に「強い時制素性 (strong tense feature)」を持つ抽象的な (つまり、音声素性を持たない) 補文標識 \emptyset_{Int} が存在し、これが接辞の特徴を持つため、時制素性を伴う語彙ホスト、ここでは法助動詞 *can*、を引きつけるからだと言う ((23)の構造および脚注 4 を参照されたい)。もしそうであれば、Tのもとにある (すなわち時制素性を持つ) *can* のコピーではなく、新たにレキシコンから持ってきた *will* を \emptyset_{Int} に付加することは、(この助動詞がまだ時制を持っていないので) 補文標識の要求を満たすものではないのかもしれない。



しかし、この理屈は、「レキシコンから引っ張ってきた *will* には時制素性がない」という前提が成り立つときにのみ成立する。だが、法助動詞は現在形か過去形の形態しか持たないのだから、レキシコンにおいてすでに時制素性を有しているとも考えられよう。いや、そうでないと、レキシコンにリストされるのは「*will* マイナス時制」といった抽象的で、全く心理的実在性のない語彙項目 (?) となってしまう。事実、CH が素性照合 (feature checking) という概念を取り入れるようになった理由はここにある (Chomsky 1993, 1995)。レキシコンには、最初から時制、一致を具現化した形で動詞がリストされており、それらが統語構造の組み立てに使用される際、それぞれの環境が要求する時制および一致の形とマッチしているかをチェックするという仕組みである。この素性照合のメカニズムは、まさに、この問題を解決するために考案されたもの。なので、(21)のような非文をも過剰生成 (overgenerate) してしまうかぎり、コピー理論は、やはり欠陥のある理論と言わざるを得ない^{5,6}。

⁵ R は、「時制は解説可能素性 (interpretable feature) なので、最初から現在/過去の違いを動詞に反映させた上で文の派生に取り込まれる」としている (p. 242)。これは、現在/過去という時制素性の「値 (value)」が、最初から動詞に内在してレキシコンにリストされていることも示唆するが、同時に、レキシコンにリストされているのは、より抽象的な動詞の形であり、レキシコンから抜き出し

3.2. 照応形束縛

移動操作の後、新たに作られるコピーとオリジナルコピーは、連鎖 (Chain) を構成するとされる。また、伝統的に、連鎖は統語上 1 つの存在とみなされてきた。よって、 θ 基準も連鎖をもとに書き換えられている。

(24) θ 基準 (Theta Criterion)

Each argument α appears in a chain containing a unique visible θ -position P, and each θ -position P is visible in a chain containing a unique argument α (Chomsky 1986: 97).

ということは、この観点からすれば、前節の議論の前提となっている「連鎖内のコピーは、いずれか 1 つだけを解釈する」という考えは、そもそも成り立たないのではないか、という疑問が生じる。連鎖が 1 つの存在ならば、そのメンバーを個別に解釈することなど不可能ではないか、ということである。

れた時点で、動詞に内在する「空の時制素性 (unvalued tense feature)」に、現在/過去のいずれかの値が与えられる、という可能性も否定できない。(この点に関して、R は一切言及していない。)

実のところ、これは controversial なトピックだ。Chomsky 1998 以降、それまでの素性照合に代わり、「アグリー (Agree)」という、一致を通して「空の素性 (unvalued features)」に「中身を与える (feature valuation)」操作が採用されるようになったからである。これにより、一般的な動詞はみな、一致に関わる素性 (ϕ -features) が unvalued という空の状態で、レキシコンにリストされていると考えざるを得なくなった。では、*be* 動詞は一体どのような形でリストされているのだろうか。動詞は、定・不定 (finite/nonfinite) の違いも形態上に反映するので (事実 Rizzi 1997 は、Finiteness Phrase を提案している)、レキシコンにリストされているときは、ニュートラルな形 (つまり、finiteness feature の値を与えられていない形) であるはずだが、それは一体どんな形なのか。(*be* は不定形なので、すでに nonfinite という値を持つと考えられる。ちなみに、R はこの抽象的な形を便宜上 BE と表している。また、「デフォルトの形」というものも考えられるが、紙幅の都合上、この点に関する詳しい議論は割愛する：脚注 6 参照。)

また、代名詞も同じ問題をはらんでいる。格 (Case) は、統語派生の中で与えられるものとされているので、レキシコン内では代名詞の形が決定できない。日本語なら、「三人称、単数、男性」という素性セットから「彼」という代名詞が導けるが、英語の場合、格の情報が加わって初めて *he* (主格) や *him* (対格) という形が決まる。よって、レキシコンには「三人称、単数、男性」という抽象的なものがリストされていると考えなければならない。しかし、これは全く心理的実在性のない帰結である。

⁶ 疑問文を導く補文標識 θ_{int} が持つのは「強い時制素性」であり、これが反応するのは動詞が持つ時制素性のみなので、ここでは一致に関わる素性 (ϕ -features) は無関係。(英語の法助動詞は、主語との一致をその形態に全く反映しないので、そもそも ϕ -features など持っていないのかもしれない。)

対照的に、助動詞の *do*, *have*, *be* は明らかに主語との一致を示すが、レキシコンから抜き出された時点では、まだ一致に関わっていないので形態が決定していないはずである。しかし、R は、*There's only me going to the party* における *is* と、この文の実質的な主語である *me* との間の一致の欠落を指摘して、「ここで *be* 動詞が *is* となっているのは、それがデフォルトの形態だから」と説明している。ならば、*do*, *have*, *be* にもデフォルトの形 (三人称・単数の形?) があっても不思議ではない。さらに、脚注 5 で指摘したように、R は「(助) 動詞は最初から時制を伴って派生に参加する」と言う。ならば、現在時制を伴った場合、*do* のデフォルト形は *does* となるので、コピー理論は、(21)に加えて、**Does you can speak English?* のような非文も生み出すことになってしまう。

しかし、そうではないと示唆する例文も存在する。移動は主要部だけでなく、(8)で見たように、句にも関わる操作であるが、wh-句移動を伴う以下のような例文は、「連鎖内のコピーは、いずれか1つだけが解釈される」という前提のもとでのみ説明され得るのだ。

(25) (= R's (22), p. 160)

Joe wonders which picture of himself Jim bought.

この文における *himself* は、先行詞として *Joe* と *Jim* のいずれをもとることができる。しかし、束縛理論からすると、照応形である *himself* は、*Jim* によって c-統御されていないので、(25)の表層構造からは、*himself* = *Jim* という解釈の説明がつかない。

しかし、以下の2つの同一指示関係を描写できるコピー理論なら、(25)の多義性が容易に説明できる（とされる）。

(26) a. Joe wonders [which picture of himself] **Jim**_i bought [which picture of **himself**]_j

b. **Joe**_j wonders [which picture of **himself**]_j Jim bought [which picture of himself]

(25)における *which picture of himself* は、もともと *bought* の補語であり、よってそのオリジナルコピーが *bought* の後ろに隠れていることになる。なので、もしオリジナルコピー内の照応形 *himself* が解釈を受けるとすれば、先行詞は自ずとその統率範疇 (Governing Category) 内にある *Jim* に絞られる (= (26a))。一方、移動によって生じたコピー内にある *himself* のほうが解釈された場合は、その統率範疇内で *himself* を c-統御する *Joe* しか、その先行詞にはなれない (= (26b))。この2つの照応関係構造が、コピー理論による(25)の多義性の説明のミソであるが、その裏には、(*which picture of*) *himself* の2つのコピーがそれぞれ独立して解釈され得るという前提が存在している。

しかしながら、「2つのコピー」という分析が本当に正しいとすれば、以下の解釈が不可能なのは、本来不思議なことではなからうか。

(27) ***Joe**_j wonders [which picture of **himself**]_j **Jim**_i bought [which picture of **himself**]_j

「たとえオリジナルコピーが消去されたとしても、それは音声素性が消されただけで、統語上は存在している」というコピー理論に従えば、LFにおいては、(27)の解釈が可能になって然るべきであろう。事実、束縛理論に関するかぎり、(27)は、次の(28)の照応関係と同等であることに注目されたい。

(28) **Joe**_j told **himself**_j that **Jim**_i loved **himself**_j.

しかし、与えられた同一指示表示のもとでは、(27)は明らかに非文である。

(28)との比較からわかることは、(27)における2つの *which picture of himself* は、結局1つの θ 役割しか持っていないということであろう。一方、(28)の *himself_j* と *himself_i* は、それぞれが *told* と *loved* から別々の θ 役割を受け取っているため、ともに一人前の項として先行詞をとることができると考えられる。この点からすると、「コピー」という用語は、どうしてもそれぞれが別個の語彙項目（項であれば独立した θ 役割を持つ項目）であることを連想させてしまうので、やはり誤称と言わざるを得ないのではないだろうか。

さらに、(26b)の解釈がなされる際、*which picture of himself* のオリジナルコピーは本当に文の解釈に関与しないのだろうか。答えは、ノーであろう。というのも、wh-疑問文では、移動前後の両方のコピーが解釈に関与するのが普通だからだ。(29)を見てみよう。

(29) I wonder [who they want to succeed].

(29)における、カギ括弧で示した従属節には、2通りの解釈がある。まず、*succeed* が「成功する」という意味の場合。その際 *who* は *succeed* の主語と捉えられる。このときの当該従属節の構造は以下のとおり。

- (30) a. who they want ~~who~~ to succeed
 b. 彼らは誰に成功して欲しいのか

一方、*succeed* には「～の後を継ぐ」という意味もある。この場合は、(31a)が示すように、*who* は *succeed* の目的語である。

- (31) a. who they want PRO to succeed ~~who~~ (中間痕跡は省略)
 b. 彼らは誰の後を継ぎたいのか

もし、*himself* = *Joe* の解釈がなされる際の(26b)の説明と同様に、(29)においても移動後の *who* のみが解釈されるとしたら、*who* が *succeed* の主語なのか目的語なのか判断できず、文解釈が不可能になる。（もちろん、(30)、(31)に見られる複数解釈の説明も不可能になる。）一方、(30)、(31)において、オリジナルコピーの ~~who~~ だけが解釈されるとしたら、当該従属節は、補文標識の指定部に疑問語を持たないことになり、以下の「疑問条件 (Interrogative Condition)」を (LF で) 犯すことになる。

(32) 疑問条件 (= R's (24), p. 161)

A clause is interpreted as a non-echoic question if (and only if) it is a CP with an interrogative specifier (i.e. a specifier containing an interrogative word).

よって、*who they want to succeed* は疑問節ですらなくなってしまうのだ。結果、*wonder* の意味選択 (s-selection) が満たされず、(29)は非文となるはずである。しかし(29)は、非の打ち所のない適格文だ。

対照的に、従来の痕跡を使った分析なら、(29)の多義性が簡単に説明できる。(33)を検討されたい。

- (33) a. who_i they want t_i to succeed (彼らは誰に成功して欲しいのか)
 b. who_j they want PRO to succeed t_j (彼らは誰の後を継ぎたいのか)

(33a,b)における連鎖、 $\{who_i, t_i\}$ と $\{who_j, t_j\}$ は、ともに1つの実在と考えられるので、痕跡も間接的に節全体の解釈に関与することになる。具体的には、痕跡の位置により、文内における連鎖の機能(主語、目的語、修飾語等)および連鎖が受け取る θ 役割が判別できるので、*who*が*succeed*の主語なのか、目的語なのかがわかる。そして、(33a,b)の2つの構造が可能であるという事実から、(29)の多義性が自ずと説明されるのだ。よって、従来の分析のほうが、ずっとすっきりしており、優れているように思える。

3.3. 不連続排出

とはいえ、前節でみたRによるコピー理論なら、以下のような文の派生でも無理なく説明できると言われる。

- (34) (= R の(18b), p. 157)
 What hope could there be of finding any survivors?

確かに、この文の派生を従来の分析で説明するのは難しい。文頭にある*what hope*は、もともと文末の*of finding any survivors*と構成素を作るからである。すなわち、(34)は、(35)に示された移動の結果、派生されたものと分析せざるを得ないのだ。

- (35) \uparrow could there be [what hope of finding any survivors]

しかし、(36)からわかるように、*what hope*の2語は、それらで構成素を作らない。

- (36)
- ```

 QP
 / \
 Q NP
 | / \
 what N PP
 | / \
 hope of finding any survivors

```

よって、(35)の分析は理論上不可能となる。

一方、Rのコピー理論では、以下のようなステップを踏んだ派生が想定される（助動詞 *could* の移動は割愛する）。

- (37) a. *could there be* [what hope of finding any survivors]  
 b. [what hope of finding any survivors] *could there be* [what hope of finding any survivors]  
 c. [what hope of ~~finding any survivors~~] *could there be* [~~what hope~~ of finding any survivors]

(37a)が示すように、*what hope of finding any survivors* は、最初 *be* の補語の位置にあり、1つの構成素を作る。次に、*what hope of finding any survivors* のコピーが作られ、それが文頭に併合される (= (37b))。 (37c)が示すのは、Rが言うところの「不連続排出」 (discontinuous spellout) である。すなわち、元位置で *what hope* を、そして移動先で *of finding any survivors* を消去して、両位置に残った語句のみを発音するという操作だ。これは、「コピーを作成して文頭に併合し、オリジナルコピーを消去する」というコピー理論の応用形と言えよう。Rは、このような応用が可能になること自体が、コピー理論のさらなるサポートであると主張する。

ここに見られる「消去」という操作は、「コピー+消去」という「移動」操作の一部であり、統語操作の一種だ。ということは、この操作も、他の統語操作が受ける制約を同様に受けて然るべきである。この観点から(37c)を見ると、問題が明らかになってくる。文頭における消去操作は、PPを作る構成素 *of finding any survivors* をターゲットとするので何の問題もないが、オリジナルコピーにおける消去の対象は、*what hope* であり、上で見たとおり、これは1つの構成素を作らない。よって、なぜ非構成素である *what hope* が「消去」という統語操作の対象になれるのかが謎なのである。つまり、(35)に付随する問題が、形を変えて(37c)に現れるのだ。このように、(34)に見られるような「不連続排出」は、決してコピー理論のサポートにはならない。

### 3.4. Chomsky 1993

これまでに紹介したコピー理論の解釈はRのものである。本節では、その元となったCH自身の説明に目を向けよう。結論としては、やはりコピー理論には無理がある、ということになる。

以下の文を見てほしい。

- (38) (= CH の(28), p. 34)  
 (Guess) [<sub>wh</sub> in which house] John lived *t*]

この文の従属節の分析だが、CHはこれを実際にLFに送られる(39)の簡略形としている。(39)には *in which house* のコピーが2つあることに注目されたい。

- (39) (= CH の(31), p. 35)

[~~wh-~~ in which house] John lived [~~wh-~~ in which house]

また、(39)は「wh-疑問節なので、LF では演算子と変数の構造が作られねばならない」と CH は言う。よって、演算子が入る場所である C の指定部には、演算子を主要部とする句のみが残り、それ以外はオリジナルコピーのほうに出現する構造ができると言うのだ。具体的には、(38)の問いかけに対する答え方として(40a,b)の 2 通りが可能なので、LF では(41a,b)のような構造が得られるはず、と説明が続く。

- (40) a. The old one.  
b. That (house).

- (41) (CH の(33), p. 35)  
a. [which x, x a house] John lived [in x]  
b. [which x] John lived [in [x house]]

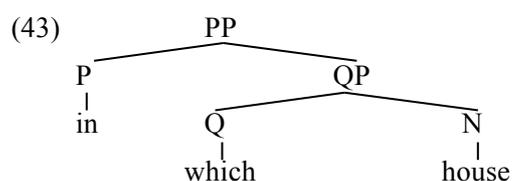
これを R 流に書き直すと(42)のようになる。

- (42) a. [~~in~~ which house] John lived [in ~~which house~~]  
b. [~~in~~ which ~~house~~] John lived [in ~~which~~ house]

前述のように、CH は「LF では演算子と変数の構造が作られる」という理由をもってして(41a,b)のような LF 構造を導くので、単に「コピー理論の機械的な応用」とも言える R の説明とは違うように感じられるかもしれない。しかしながら CH は、(41a,b)に関して以下のように書いているので、やはり R の説明と同じ問題を抱えることになる。

In the present case (perhaps generally), these choices need not be specified; other options will crash (Chomsky 1993, p. 36).

派生が「クラッシュする」ということは、統語上の非文ができることを意味するので、やはり(41)、(42)を得るための操作は、統語操作ということになる。しかし、もしそうなら、(42b)の文頭における *in* と *house* は、以下の(43)が示すように、非構成素なので、これらをターゲットとした操作は不可能なはず。つまり、(37c)に見られた問題がここにも現れるのである。



ちなみに、((41)をもとにした) (42)における消去操作は、Rによるものとはある1点において異なっている。Rによる消去は、あくまで音声素性のみでの消去なので、消去を受けた語(句)は発音されないだけで統語上は残るため、LFでは解釈の対象となり得る。一方、(42)に見られる操作は、発音される統語構造ではなく、LF構造のみに影響を与えるもの。すなわち、ここでの消去は真の消去であり、消された語彙項目は文字通り消え去るので、解釈の対象にはならないのだ。だが、これもスタンダードなコピー理論の一部なのだろうか。確かに、(38)に対する(40a,b)の返答がともに可能であることを説明するには、LFにおいて(41)のような構造ができていると都合がいい。しかし、せっかくコピーを作っても、片方のコピーを完全消去するのだったら、痕跡を残さない(真の)移動とは何が違うのか。

いずれにせよ、(41)、(42)のような構造は、システマティックな統語操作では作れないので、コピー理論にはやはり無理があると言わざるを得ない。

#### 4. 結論

以上のように、コピー理論で移動現象を捉えるには、アドホックな規定やあり得ない統語操作がどうしても必要になる。その究極の例として、最後に中国語に代表される *wh-in-situ* 言語についてのRの見解を紹介して、本稿を閉じたいと思う。

A further possibility which this [= コピー理論] opens up is that *wh-in-situ* structures in languages like Chinese may involve *wh*-movement, but with the moved *wh*-expression being spelled out in its initial position (at the foot of the movement chain) rather than in its final position (at the head of the movement chain) (p. 160).

これは、「中国語のような、見かけ上 *wh*-移動を起こさない言語にも *wh*-移動は存在するが、発音されるのは文頭のコピーではなく、常にオリジナルコピーのほうなので、何も移動していないように見えてしまうだけ」ということだ。普遍文法の観点からすると、何とも魅力的な分析の提案である。

とはいえ、この分析は経験的な証拠に裏付けされたものではない。それどころか、反例が山のように見つかる。以下にその1例を挙げよう。日本語も中国語と同じく、*wh*-移動を起こさない言語であるが、*wh*-移動を起こさないがゆえ、*subjacency* のルールに触れることもない。以下の例を参照されたい。

(44) あなたは誰が書いた本を買ったのですか。

(44)は関係節の島を含む例文である。よって、*wh*-句である「誰が」がこの島を飛び出して主節の[Spec, C]まで移動していたならば、非文となって然るべき文だ。事実、(44)に対応する英文(45a)は、完全なる非文である。(45b)から明らかのように、関係節が *book* を修飾し、

complex NP を形成している。そして、もともと関係節内にあった *who* が、この島を飛び越えて文頭に移動するため、subjacency を犯すのである。

- (45) a. \*Who did you buy a book that wrote?  
 b. Who did you buy [a book [OP that ~~who~~ wrote ~~OP~~]]

しかし、日本文の(44)には、どこもおかしなところがない。もし、派生の途中で「誰が」が主節の[Spec, C]に移動し、その後、移動先でこのコピーが消されたのなら、統語上は残っているのだから、(45a)同様、(44)も subjacency 違反として非文となるべきだろう。

コピー理論を応用した、R による日本語や中国語における wh-移動の分析では、移動があっても、その都度、移動先のコピーが消されるというのだから、移動の事実が全く観察されないことになる。それでは何のための「移動」なのだろうか。経済性を重視するわりには、何とも不経済な話である。

コピー理論は、(今のままでは)あまりに牽強付会に過ぎる説と言わざるを得ない。やはり、改訂が必要であろう。

#### 参考文献

- Chomsky, N. 1993. "A minimalist program for linguistic theory," in Hale, K. and S. J. Keyser (eds), *The view from building 20*. MIT Press: Cambridge, Mass. pp. 1-52.
- Chomsky, N. 1986. *Knowledge of language: its nature, origin, and use*. Praeger: New York.
- Chomsky, N. 1995. *The minimalist program*. MIT Press: Cambridge, Mass.
- Chomsky, N. 1998. *Minimalist inquiries: the framework*. MIT Occasional Papers in Linguistics 15. MITWPL: Cambridge, Mass.
- Chomsky, N. and H. Lasnik. 1977. "Filters and control," *Linguistic Inquiry* 8: 425-504.
- Radford, A. 2009. *An introduction to English sentence structure*. Oxford University Press: Oxford.
- Rizzi, L. 1997. "The fine structure of the left periphery," in Haegeman, L (ed), *Elements of grammar*. Kluwer: Dordrecht. pp. 281-337.

# 第 13 回大会記録

## 《個人発表報告》

## 1. はじめに

本研究では、補助動詞「～てしまう」<sup>1</sup>に前接する動詞を意志動詞と無意志動詞に分類し、それらの動詞と「アスペクト的意味」、「感情・評価的意味」との関係性を明らかにすることを目的とし、用例の考察を行った。用例は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス（以後 BCCWJ と記す）』から抽出した。

その結果、「感情・評価的意味」が付加されず「アスペクト的意味（完了）」だけで用いられることは少ないこと、また「完了」の意味だけで用いられる場合は、意志動詞と関係性が強い可能性があることが明らかになった。そして、「感情・評価的意味」の関係については、前接する動詞が、意志動詞であれ、無意志動詞であれ、「喜び」といったプラスの意味より「遺憾」のようなマイナスの意味を表すことが多いということまで明らかになった。以下第2節から研究の背景、目的、考察の基準、そして考察という順で述べていく。

## 2. 研究の背景と目的

補助動詞「～てしまう」については、金田一（1955）以降、多くの研究がなされている。その意味には、「アスペクト的意味」と「感情・評価的意味」があることが明らかにされている。「感情・評価的意味」については、「遺憾」等のマイナスの意味、あるいは「喜び」等のプラスの意味があると指摘されている。一方、「アスペクト的意味」は、「～てしまう」に前接する、例えば、継続動詞、瞬間動詞、変化動詞等の動詞と「アスペクト的意味」との関わりについても議論され、完了、終結、実現、開始といった意味があると分析されてきている。

動詞と「感情・評価的意味」との関わりについて指摘する論文は、杉本（1991）、庵他（2000）がある。杉本（1991）は、無意志動詞と「モダリティ的意味（感情・評価的意味）」の関わりについて論じている。庵他（2000）は、「～てしまう」は基本的に動作主が意志的に行ったものであるため、前接する動詞が無意志動詞の場合は、完了<sup>2</sup>を表しにくく、遺憾の意味になりやすいと述べている。庵他は、意志動詞と「完了（アスペクト的意味）」、そして無意志動詞と「遺憾（感情・評価的意味）」との関係が深いことを示唆しているとも考えられる。

「茶わんが割れてしまいました」「茶わんを割ってしまいました」というように意志動詞、無意志動詞の使い方は、その責任を明確にしたり、回避したりする機能を持つと考えられ、興味深い視点であると筆者は考える。しかしながら、前接する動詞と「感情・評価的意味」との関わりについて言及されたものは、管見では、上記2者の他には、吉川（1973）が存在するのみで、議論が尽くされているとは言い難い。動詞（意志動詞及び無意志動詞）と「～てしまう」との関わりについて、より信頼性の高い結論に近づけるためには、さらに多くの側面からの考察が必要であろう。その糸口としたく、本研究では、コーパスを用いて、意志動詞及び無意志動詞と「～てしまう」の意味との関係について考察していくことにする。「～てしまう」の意味とは、マイナスの意味、プラスの意味を表す「感情・評価的意味」および、「完了」を表す「アスペクト的意味」についてである。なお、筆者は、「～てしまう」の基本義（文脈に左右されない意味）は「アスペクト的意味」であり、「感情・評価的意味」は、文脈より派生する意味であると考え（中山：2014 参照）。それゆえ、「アスペクト的意味」については、「感情・評価的意味」との区別化のため、「感情・評価的意味」の付加されない「完了」の意味のみを持つ「～てしまう」をカウントし、それが、意志動詞、無意志動詞と関連があるのかを考察する。

さて、考察の前に、まず、意志動詞、無意志動詞を区別するための基準を明らかにする必要がある。これを本研究の第一の目的とする。次に、コーパスについては、BCCWJ からデータを抽出し、次節でまとめる区別の基準に従い、意志動詞、無意志動詞に分類する。その後、「アスペクト的意味（完了）」、「感情・評価的意味」に現れる意志動詞・無意志動詞の数を求め、それぞれの関連を考察する。これを第二の目的とする。

<sup>1</sup> 以降、補助動詞「～てしまう」は、補助動詞を省略し「～てしまう」と記す。

<sup>2</sup> 庵は、「～てしまう」の「アスペクト的意味」を完了という言葉で説明している。筆者は、「～てしまう」は発話時点で事態を終結させる一点を表すと考える（中山：2014 参照）。それは、庵の捉え方と重なる。本研究では、用語の統一のため、終結とせず庵の「完了」という言葉を用いる。

### 3. 意志動詞と無意志動詞の分類基準

意志動詞か、無意志動詞かという動詞の分類は、以下、吉川 (1974: 73) の基準[1][2]が詳しい。本研究では、それを分類基準とする。

[1]意志動詞は、「行こう」のような「意向形 (ウの形)」で「誘いかけ」を意味し、「行け」のような「命令形」で「命令」を意味することができる。また、動作動詞の中の意志動詞は、話し手の現在の意志を表す。

[2]無意志動詞には、以下①～⑤がある。

- ①非情の動き (例: 流れる) / ②自然現象 (ひかる) / ③人間の生理的な現象 (むせる) /  
④人間の心理的な現象 (あきる) / ⑤可能動詞 (およげる)

吉川 (1974) は、「上記 [1] 意志動詞の意向形は、誘いかけを表す。他方、[2] 無意志動詞の①②⑤の意向形は、「①川は流れよう」のように『推量』表す」と指摘している。[2] ③④の場合は、「④ (こんなものを飲んだら) むせよう」というように「推量」あるいは、「演技としての誘いかけ」を表すと述べている。また、無意志動詞の命令形は、「流れよ、光れ、あきろ」というように相手に対する願望になると述べている。

このような吉川の観察に加え、庵他 (2003) 及び森山 (1984) が指摘するように文中の語句の意味の影響も重要になる。庵他 (2003) は、以下 (1) の例を挙げて、その視点の必要性を指摘している。

(1) 彼女の家に電話を掛けるとつい長話しちゃうんだ。 (庵他 2003: 11)

(1) の「長話する」はそれだけでは、意志動詞であるが、「つい」という副詞が付加されることで、文全体が無意志化すると述べている。本研究では、考察上、これも無意志動詞として扱う。以下 (2) で具体的に考察する。

(2) a. 映画をチェックする。 (意志動詞)

b. 映画をチェックしてしまう。 (意志動詞)

c. うっかり、韓流映画までなんとなくチェックしてしまう。(無意志動詞) (ブグ 0Y15\_23959)

(2a) (2b) 「チェックする」は意志動詞であるが、(2c) の文は、「うっかり」「なんとなく」が付加されており、「チェックする」が無意志動詞化する。このような場合も「無意志動詞」としてカウントした。

さらに無意志動詞が意志動詞化する例 (3) についても考察する。

(3) a. 心がロボットのようになる。 (無意志動詞)

b. 心がロボットのようになってしまう。 (無意志動詞)

c. (変身遊びをしながら、幼稚園の先生が子供たちに向かって言う場合) みんな、今度はロボットになってしまおう。 (意志動詞)

(3a) (3b) 「なる」は無意志動詞である。「心がロボットのようになる」と意向形にした場合、「なる」は推量の意味になり、誘いかけの意味にはならないことから判断できる。(3c) 「なる」は「意向形」で用いられていることから明らかであるが、意志動詞であり、意志動詞としてカウントする。

分類にあたっては、このように、まず意味や形態を頼りに意志動詞、無意志動詞のどちらかに区別する。さらに必要に応じて、文全体に視野を広げ、修飾語句まで観察の対象にし、用例を分類していく。第6節でBCCWJから抽出した動詞の分類結果を挙げ、その考察を行う。その前に、第4節で「感情・評価の意味」について「マイナスの意味」、「プラスの意味」の区別について、第5節でデータの扱いについて確認する。

### 4. 「感情・評価の意味」がマイナスの意味であるか、プラスの意味であるかの区別

以下(4)～(6)で「感情・評価の意味」について詳しく見る。「・・・」部分の省略は筆者による。

(4) ・ ・ ・ 今までひっかかっていたものが、全て落ちてしまった、さわやかな気分である。(書籍 LBi3\_00068)

(5) ・ ・ ・ 反動がくると共に人気は落ちてしまって、株式の半分方は引き取り手がなくなった。

(書籍 LBg3\_00042)

(6) ・ ・ ・ 良い食材は美味しいので自然に食べてしまうものです。(Yahoo!知恵袋 OC10\_00004)

(7) ・ ・ ・ 他のもを食べてしまい、結局ダイエット効果は・ ・ ・ ゼロでした。(Yahoo 知恵袋 OC09\_02926)

(4)(5)は、同じ「落ちてしまう」であるが、文脈から(4)はプラスの意味、(5)はマイナスの意味であることが分かる。(6)(7)については、(6)はプラスの意味であり、(7)はマイナスの意味である。このようにマイナスの意味か

プラスの意味かの判断には、文脈が必要になる。

## 5. データ

BCCWJ からデータを抽出する際、以下の動詞を含むデータを収集し、考察の対象とする。

### 5. 1. 分析対象のデータ

「なる」「する」「食べる」「落ちる」の4つの動詞を考察の対象にした。「成る(なる) 個数: 14,887」は、「しまう」に前接する動詞のうち最も出現頻度が高い。無意志動詞であり、自動詞である。「為る(する): 13,301」は2番目に出現頻度が高く、意志動詞であり、他動詞である。その他に、先行研究でよく例に挙げられる動詞「食べる: 400」、そして「食べる」のデータ数に近い「落ちる: 384」を考察の対象にした。「食べる」は意志動詞であり、他動詞である。一方、「落ちる」は無意志動詞であり、自動詞である。BCCWJの「する<sup>3</sup>」「なる」は全データのうち最初に検索された2000を、「食べる」「落ちる」については全用例を観察した。なお、「する」「なる」については、まず5. 2. で示す排除するデータを除いた。その後、最初の2000の用例を抽出した。

### 5. 2. 排除したデータ

排除したデータは(8)(9)の通りである。「なる」と同音異義語の(8)のようなデータは除いた。「する」については、(9)のように「なくす」、「とかす」のようなデータも入り込んだが、それらも除外し、「音がする」「～たりする」や待遇表現である「お～する」なども除いた。

(8) なる: 鳴る、慣れる/お(ご)～になる

(9) する: なくす、とかす/音がする/～たりする/お(ご)～する

## 6. 結果と考察

抽出したデータは、第3節の基準に基づき分類し、表1のようにまとめた。

(表1)「～てしまう」に前接する動詞と意味(( )内は、用例数/意志・無意志動詞別総数(%)を表す)

|                         | する        |            | なる <sup>4</sup> | 食べる       |        | 落ちる       |
|-------------------------|-----------|------------|-----------------|-----------|--------|-----------|
|                         | 意志        | 無意志        | 無意志             | 意志        | 無意志    | 無意志       |
| 総数(意志動詞・無意志動詞別)         | 994       | 1006       | 2000            | 380       | 20     | 384       |
| アスペクト的意味(完了)のみを持つ用例数    | 26(2.6)   | 0          | 0               | 17(4.5)   | 0      | 0         |
| 「感情・評価的意味」プラスの意味を表す用例数  | 14(1.4)   | 4(0.4)     | 4(0.2)          | 47(12.4)  | 2(10)  | 2(0.5)    |
| 「感情・評価的意味」マイナスの意味を表す用例数 | 954(96.0) | 1002(99.7) | 1996(99.8)      | 316(83.2) | 18(90) | 382(99.5) |
| 合計(動詞別)                 | 2000      |            | 2000            | 400       |        | 384       |

上記の結果から、以下のようなことが明らかになった。

①「アスペクト的意味(完了)」のみを表す用例は少ない(2.6%、4.5%)。動詞を見ると、無意志動詞は0%である。意志動詞も多いわけではない(2.6%、4.5%)ものの、完了の意味を持つ用例では、意志動詞だけが抽出された。完了のみの意味を持つ用例に、以下のような例があった。

(10)・・・解凍したら、10日ほどで食べてしましましょう。

(Yahoo!知恵袋 OC8\_06865)

(11)・・・全部食べてしまった後、・・・きれいに拭いて返したものだ。

(書籍 PB27\_00129)

②無意志動詞は、プラスの「感情・評価的意味」を表すことが少ない(0.2%~10%)。意志動詞も、無意志動詞は

<sup>3</sup> 本研究において、「記入する」「購入する」等、漢語サ変動詞も「する」にカウントしている。「チェックする」のような外来語サ変動詞の場合も同様である。

<sup>4</sup> 考察対象の用例には意志動詞「なる」はなかった。

どではないが、少ない (1.4%, 12.4%)。

③無意志動詞は、マイナスの「感情・評価的意味」を表すことが多い (90%~99.8%)。意志動詞も、無意志動詞ほどではないが、多い(83.2%, 96.0%)。

上記①~③を詳しく見てみる。①「完了」というアスペクト的意味だけで用いられる用例は少ないことから、多くの場合、「完了」の意味に「感情・評価的意味」が付加されると考えられる。つまり、「完了」のみの意味で用いられる例(11)のような表現は少なく、「ダイエット中なのに食べてしまった」あるいは「おいしいから食べてしまった」というように、「完了」の意味にマイナスやプラスの「感情・評価的意味」が付加されることが多いのではないかということである。なお、「アスペクト的意味(完了)」に前接する動詞として、無意志動詞は0%であるということから、「アスペクト的意味(完了)」のみを持つ「～てしまう」は意志動詞との関係が強い可能性がある。ただし、調査対象の動詞に限って言えることであり、抽出された動詞数も十分な数というわけではない。

次に②③である。本研究で対象とした4つの動詞だけでは、意志動詞及び無意志動詞のそれぞれと「感情・評価的意味」の関わりを説明できる明らかな数値は出ていない。しかしながら、意志動詞、無意志動詞のいかに関わらず、マイナスの意味あるいはプラスの意味を表出することが明らかになった。そしてさらに明確に言えることは、「～てしまう」に前接する動詞が、意志動詞であれ、無意志動詞であれ、プラスの「感情・評価的意味」より、マイナスの「感情・評価的意味」を表すことが多いということである。

## 7. まとめと今後の課題

本研究は、意志動詞、無意志動詞と「～てしまう」の「アスペクト的意味」、「感情・評価的意味」の関係を明らかにすることを目的としていた。考察の前に、意志動詞、無意志動詞に分類する基準を設定し、その基準にしたがって分類し、考察を行った。その結果明らかになった点が4つある。まず、「アスペクト的意味(完了)」のみで用いられることが少なく、「完了」の意味に「感情・評価的意味」が付加されることが多いことである。そして、「アスペクト的意味(完了)」のみを持つ用例においては、無意志動詞が0%であったところから、意志動詞と完了の意味の関係が強い可能性がある。次に、意志動詞や無意志動詞と「感情・評価的意味」の関係については、意志動詞や無意志動詞のいかに関わらずマイナスの意味、プラスの意味を表出することである。そして最後に「喜び」等プラスの意味より、「遺憾」等マイナスの意味の用例がはるかに多いことである。意志動詞と無意志動詞のそれぞれと「感情・評価的意味」の関係については明らかにする数値は出なかった。

発表後に、「意志動詞」、「無意志動詞」の区別に関する基準をさらに明瞭にすべきではないか、「つい～てしまう」の「つい」はどこを修飾しているかの視点も必要ではないか等のコメントを受けた。今後考察対象の動詞を増やすと共に、このような視点も取り入れ、さらに詳しい考察を続けていきたい。必要に応じ、統計的な視点も加えていきたい。

### <引用文献・関連URL>

庵功雄、清水佳子 (2003) 『時間を表す表現-テンス・アスペクト』スリーエーネットワーク

庵功雄、高梨信乃、中西久美子、山田敏弘 (200) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

杉本武 (1991) 「『てしまう』におけるアスペクトとモダリティ」『九州工業大学情報工学部紀要』4, 109 - 126

中山富子 (2014) 「補助動詞『しまう』の意味—アスペクトからの一再考」『言語教育・コミュニケーション研究』9, 33-64

森山卓郎 (1984) 「アスペクトの意味の決まり方について」『日本語学』3, 70-84

吉川武時 (1973) 「現代日本語動詞のアスペクト」『日本語動詞のアスペクト』(1976) 金田一春彦(編)に所収, 155-328

吉川武時 (1974) 「日本語の動詞に関する一考察」『日本語学論集』1, 67 - 76

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』中納言 1.1.0 版、短単位データ 1.0 版

<http://chunagon.ninjal.ac.jp/>

「正解」から、「つながり」の実現へー必修リーディング・リスニングクラスでの試み。

大橋 弘顕（横浜国立大学）

## 1. はじめに

「正解」を求める授業から、「つながり」の実現へ（"From Perfection To Connection"）をキーワードに行った横浜国立大学工学部の多読・多聴の授業活動報告を行うものである。ここでは多読の活動に絞って報告するものとする。

## 2. 背景

### 2-1. 1 LR とは？

1 L/R とは一学年必修のリスニング/リーディングの授業であり、前記と後期では授業内容が異なる。後期は英語統一テスト {TOEFL (PBT)} の点数がそのまま受講生の評価に反映される関係上、テスト対策用の授業を行う。一方前期においてはオーセンティックな教材の多読、多聴力を養う授業を行う。教材はあらかじめ選定されたリストの中から各講師が選択をする。講師自ら教材を選定することも可能であるが、その場合は学部評議会の承認が必要である。前期 1 LR の教材としては、時事ネタや社会の諸問題等を取り扱った教科書、または新聞や映画などを用いるのが通例である。

### 2-2. 受講生の現状

学期初めに行った受講生(38名)アンケート調査において、ある受講生像が浮かび上がった。英語は重要な科目であるとの認識はあるものの、自主的に英語に触れる努力はしていない。そして、英語に対する苦手意識がある。その内訳であるが、英語は大事な科目だと思っている受講生が 95%、英語が好きな生徒は 16%、そして、自由時間に自主的に英語を勉強している生徒は 5%であった。また小説等のオーセンティックな教材の多読経験がある生徒は 34%であった。高等学校の学習指導要領(2009)によれば中学、高校で習う単語数は 3000 語程度であるが、小説を理解するには 9000 語が必要 (Nation, 2006)とされる。よって 1 LR は、英語に苦手意識があり自主的に英語を勉強しない多くの受講生に対し、現状の単語レベル以上の文章の多読を強いるクラスであるといえる。受講生にとっては困難を極めるクラスであることが容易に予想できる。

### 2-3. なぜ、つながりなのか？

なぜ受講生たちは英語に対して肯定的になれないのであろうか？ 「幸福学」の専門家、Shahar(2008)は「幸せ」を、"The overall experience of pleasure and meaning." と定義している。Shahar の定義を当てはめるならば、彼らは英語の意義 (meaning) を多かれ少なかれ認識してはいるながらも、現状の英語との関わりに喜び (pleasure) を見出せてはいないと言える。多くの受講生にとって英語に触れる唯一の時間は授業時であることから、従来の「訳読法」等に代表される教育法がその原因のひとつである可能性が考えられる。従来の英語教育が受講生に求めてきたもの、それは、唯一無二の「正解」ではなかったであらうか。「正解」を求める教育は、それが成し遂げられなかった者に社会学者 Brown (2012) が指摘するところの、"Scarcity" (欠乏感) を与える。英語が苦手な受講生たちは、"You are

not enough”というメッセージを教育の場において受け続ける。彼らが感じている苦手意識はその証明とは言えまいか？ また、「正解」を求める授業は得てして教師の一方的な講義になる側面がある。現状の受講生の力で洋書を読みこなそうとするには多くの労力が必要であり、手取り足取りの指導が王道なのかもしれない。しかし、一方で多読の手法を学んだ上で受講生同士力を合わせるならば、現状の力で要点を理解することは可能なのではないかと考えた。「つながり」の授業の目的は、受講生なりに洋書の内容とつながることである。「正解」することを目的とせず、本から得られる自分なりの「気づき」の構築に価値を置く。そのための手段として「読む体力」を養い、要点を理解する技術を身に付け、そして受講生同士が「つながり」を実践するのである。

## 2-4. 教材

多読授業の最たる目的は、英文を多量に読ませることである。受講生にとって適切な難易度であり、かつ人生に役立つ実践的な一冊であることが望ましい。以上を踏まえ心理学の一分野である「幸せ学」(Positive Psychology)に関する書籍を学部評議会の承認を得た上で選択した。人生をより充実したものにするための知恵や思考法、実践方法を科学的に紐解く洋書 (Tal Ben-Shahar 著、“Happier”) である。英語を学ぶため洋書を読むのではなく、幸せな人生を歩むための科学を学ぶ過程で英語力を高めるのが狙いである。TOEFL テストの Reading Section と同等程度の難易度であるのに加え、テーマの普遍性も選択した理由の一つである。

## 3. 「つながり」の授業

### 3-1. アプローチ

「つながり」—“to connect”であるが、Oxford Advanced Learner’s Dictionary に以下の解説がある。“to notice or make a link between people, things, events, etc.”/“(especially NAmE) to form a good relationship with sb so that you like and understand each other.”

上記の定義を踏まえ、受講生が各自、自分なりに教材とリンクし、ディスカッションを通して内容の理解を深め、その過程で何らかの「気づき」を得ることを授業の目的とした。この授業において講師の仕事は、一方的に正解を与え間違いを添削することではなく、「つながり」を通して「気づき」を導き出すことである。Scarcity からの脱却を目指すには、できない (I am not enough) から、できる (I am enough) への意識転換が必要だと考える。本来「間違い」は上達するためのプロセスに過ぎないはずである。「間違い」は認識される必要はあるが、フォーカスはしない。受講生の現状の英語力で理解できたことにフォーカスして授業を行った。

### 3-2. 授業活動

本の内容を「気づき」に導くために、授業において3つの「つながる活動」を経た。

#### 1. 本とつながる活動 (内容とリンクする)

##### A. 読ませる

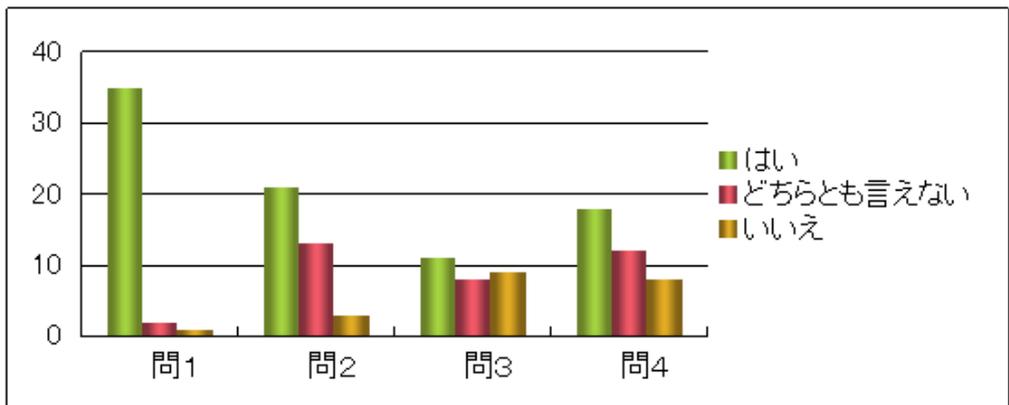
##### B. Reading Strategy の確認

- C. 章の要点が一目で分かるようにまとめる (Mind Map 化)
- 2. 受講生同士がつながる活動 (本の内容、及び受講生間の理解を深める)
  - A. 受講生同士で Mind Map を比較。
  - B. 講師の Mind Map と比較
- 3. 自分とつながる活動 (「気づき」を導き出す)
  - A. グループディスカッション
  - B. 「気づき」の記載

授業活動の軸となったのはマインドマップである。筆者は *Mind Map* をブレインストーミング、及びディスカッションにおいて活動の軸とした。「脳のスキルを活用し、放射思考でデータを収集し、学習を続ければ、学ぶことがもっと楽になる。マインドマップは放射思考を外面化させたものだ」(Buzan, 2010, p. 56)とあるが、自分なりの理解、視点や回答を紙面上に一目で分かるように表現できるの特徴である。答えにたどり着くまでの思考プロセスを他人と容易に比較できる。よって、レベルの異なる者同士が共に協力し、話し合いながら活動することで活気のある授業が展開できる。 *Mind Map* 活動と並行して、多読時の辞書の使い方、単語の意味の広がりや頻度、コロケーションなどに言及し(Reading Strategy)、授業毎にその手法を確かめた。

#### 4. 受講生の反応

##### 4-1. アンケート結果



| 質問 (全体 38 名)           | はい      | どちらとも言えない   | いいえ     |
|------------------------|---------|-------------|---------|
| 問 1 . 過去最大量の英文を読んだ。    | 35(92%) | 2(5%)<br>ない | 1(3%)   |
| 問 2 . この本の英文は難しかった。    | 21(57%) | 13(35%)     | 3(8%)   |
| 問 3 . 課題で出された章は全部読んだ。  | 11(29%) | 8(21%)      | 19(50%) |
| 問 4 . 機会があれば残りの章を読みたい。 | 18(47%) | 12(32%)     | 8(21%)  |

#### 4-2. アンケート自由回答欄にあったコメント

肯定的な意見(全 18 回答)

| 回答                              | 詳細                                                   |
|---------------------------------|------------------------------------------------------|
| 教材が面白かった<br>(12 回答)             | 英語を学びながら幸せについても学ぶことが出来る点良かった。英語を楽しく学びたいと思うことができた。    |
| ディスカッションでコミュニケーション力が付いた。(13 回答) | コミュニケーションについて学べる点良かった。グループで活動して考えをまとめて発表し合うところが良かった。 |
| 単語力が付いた(6 回答)                   |                                                      |

否定的な意見(全 7 回答)

| 回答                  | 詳細                           |
|---------------------|------------------------------|
| 和訳がほしかった。(3 回答)     | "Happier" の内容をもっと詳しく解説してほしい。 |
| 予習が大変だった。(2 回答)     |                              |
| 本を読んでこない人がいた。(2 回答) |                              |

#### 5. 最後に

次回に向けての反省点は 2 点ある。問 3、及び問 4 の結果である。まずは本を読むにあたり、外発的動機づけ(受講生の本をチェックする機会を増やすなど)を与えるべきだったこと。次に、受講生の理解度を高める活動を増やすこと(専門用語の解説を増やすなど)などの施策が考えられる。授業の結果、コミュニケーション能力が付いたといった声が多かったのは予想外であった。英語以前に、普段他人と話し合う機会が少ないのであろうか？

#### 参考文献

Nation, I. S. P., (2006). How large a vocabulary is needed for reading and listening? Canadian Modern Language Review, 63(1), 59-82.

Tal Ban-Shahar. (2008) Happier. McGraw-Hill Publishing company. Berkshire.

Brene Brown. (2012) Daring Greatly. Penguin Books Ltd. London.

トニー・ブザン/バリー・ブザン (2010) 「ザ・マインドマップ」ダイヤモンド社

Oxford Advanced Learner`s Dictionary 7th edition. (2005) Oxford University Press

高等学校学習指導要領、文部科学省

URL : [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/news/081223/007.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/news/081223/007.pdf)

## 0. はじめに

日本語で時を示す際に用いられる語のひとつに「先」がある。「さき」と読む場合は発話時から見て未来と過去の両方を表し、「せん」と読む場合は過去を表すことは伊藤(2008)、安井(2010)、真栄城(2012)等の先行研究で述べられている。時と方向の概念的結びつきに関してはその他 Lakoff & Johnson (1980)および(1999)等においても論じられている。「先」が用いられた表現を観察すると「矢先」や「時代の先端」など「さき=未来・過去」、「せん=過去」という等式が成立せず、時間的に中立な場合や「せん」がむしろ未来志向に捉えられる例も存在する。そこで本稿では「さき」と「せん」によって表される物理的な事物を人間がどのように捉えるのか検討し、「過去」や「未来」といった時の概念に用いられる仕組みを我々の視点を基盤にして説明する。

## 1. 物理的用法の「先」

「先」によって示される時について検討する前に我々が「先」によって表される物理的事象をどのように捉えているのかを考察する必要がある。物理的用法としての「先」には物体の一部分を表す場合もあれば空間において基準になる地点よりも離れた所を表す用法がある。

- (1) バットの先 / 指先 / 枝の先
- (2) 公園の先に学校がある。 / 公園の(ずっと/3km)先に学校がある。
- (3) 半島のずっと先のほうまで行こう。 / 半島の先端まで行こう。
- (4) \*半島のずっと先端まで行こう。

物理的用法の「さき」は「ずっと」のような程度を表す副詞を伴うことができ観察者の視点から極点までの視点移動が暗示される場合もあれば、観察者の視点から離れた極点の部分のみが焦点化される場合もある。一方、「せん」については用法が限られていて極点の部分にのみ焦点が当てられると考えられる。つまり、図1で示されるように、「さき」に関しては基準になる位置から極点までの視点の移動が含意される場合と極点にのみ焦点が当てられる場合があるのに対し、「せん」は視点の移動を含意せず単に極点の部分を表す場合にしか用いられない。

図1 観察者の視点  $\triangle \longrightarrow \blacktriangle$  さき

観察者の視点  $\triangle \cdots \rightarrow \blacktriangle$  さき・せん

## 2. 「先」によって示される時の表現

### 2.1. 「先」が示す時の捉え方

日本語の「先」という語は(5)-(7)の例に見られるように「さき」と読む場合は発話時から見て未来と過去の両方を表し、「せん」と読む場合は通常過去の出来事を表す。

- (5) 先延ばし / 先行き 「未来」
- (6) 私は彼より先に着いた 「過去」
- (7) 先月 / 先週 / 祖先 「過去」

「先」が未来や過去を表す仕組みを示すために安井(2010)では槍がもつ概念が提唱されている。槍の手元の部分を現在と捉え、槍の先の部分を未来と捉えるとした上で次のように説明されている。

- (8) 「先」が過去を意味することになるのは、人(話し手)の視点から見た槍の「先」なのではなく、英語の **the preceding day** と同様に、未来から過去に向かって動いている「時」の視点から見た槍の「先」であると考えればよい。

—安井 (2010:113)

この説明では「さき」と「せん」で捉えられる方向が異なる理由が明確でない。また、「せん」を説明するのに「さき」を用いているため循環論になっていることや、「時代の先端を行く」や「先端技術」のように概念的には過去を表さない表現は槍の概念を用いて説明することはできない。「さき」と「せん」は読み方が違うものの同じ漢字「先」が用いられているため、過去や未来のように一見対立的な時の概念においても共通する方向性で捉えられると考えられる。Lakoff & Johnson (1991: 141)では過去の方角性について次のように述べられている。

- (9) **The Past Is In Front is grounded by the experience of being able to see the results of what you have just done in front of you.**

—Lakoff & Johnson (1999: 141)

過去に起きた出来事は結果状態として存在していることが含意され可視化できる事象であると捉えられる。要するに、過去の事象は我々が対象物を知覚する方向、つまり「前」方向の概念で捉えられる場合があると考えられる。日本語の「先」に関しては第1節で検討したように「さき」「せん」のように読み方が異なっても観察者の視点から離れた部分が焦点化されるのは共通である。過去と未来に関しても発話時から離れているという点では共通であり、物理的用法としての「先」の概念を基盤にして言語表現に反映される。(10)-(13)のように観察者(発話時)を視点として図式化することで、「先」が包含する時の概念が明確になる。

- (10) 先を走る列車が遅れている 空間 観察者の視点 (発話時)  $\triangle \longrightarrow \blacktriangle$
- (11) 先に出た列車が遅れている 過去 観察者の視点 (発話時)  $\triangle \cdots \rightarrow \blacktriangle$
- (12) 先行列車<sup>2)</sup>が遅れている 過去 観察者の視点 (発話時)  $\triangle \cdots \rightarrow \blacktriangle$
- (13) 3年先に運行予定の列車 未来 観察者の視点 (発話時)  $\triangle \longrightarrow \blacktriangle$

物理的な事象において極点の部分のみを表す「せん」は(12)のように時を示す用法においても時の一点として解釈される。「さき」が未来を表す場合は物理的用法としての「さき」に含意される視点移動的な概念が転移し、過去を表す場合は「さき」によって示される物体の極点の部分のみが転移すると考えられる。そのため、次の(14)-(15)のように修飾語句を伴い発話時と出来事発生時の時間的な隔たりが言及されて時における視点移動がある過去の事象を「先」で表すことができないと考えられる。

(14) \*5分先<sup>1)</sup>に出た列車が遅れている

(15) \*5分先行する列車が遅れている

## 2.2. 「先」が用いられたその他の表現

「先」を「せん」と読む場合は(7)や(12)のように過去を表す場合と次の(16)のように概念的には過去の概念を包含せずむしろ未来志向を示す用例も存在する。

(16) 時代の先端を行く / 先端技術

この用例では発話時から見て時代や技術が進んでいくことが示されるが、時代や技術が発話時から変化してかけ離れたものになることが暗示されると考えられる。

(17) 建設工事を進めていた矢先に台風が襲った

手元 (工事の開始時) △ —————> ▲ 矢先 (工事の中断+台風の襲撃)

「矢先」に関しては矢の手元の部分を基準時、手元から極点までの部分を出来事の進行過程、極点の部分を出来事の終了時および次の出来事の開始時として捉えることができる。

## 3. まとめ

日本語の「先」が時を表す用法は数多く存在する。用例により未来を表す場合もあれば過去を表す場合もあるが、いずれの表現においても観察者の視点から離れた部分という「先」が包含する概念を基盤にし、視点移動の観点を加えて分析することでそれぞれの表現が明確になると考えられる。「先」が用いられたその他の言語表現、および時に関する用法としての「先」と「後」および「前」と「後」の分析は今後の研究課題とする。

### 【注】

1) (14)を「5分前<sup>1)</sup>に出た列車が遅れている」のように先の部分を前にとすると発話時と出来事発生時の時間的な隔たりを表す修飾語句(5分前)を加えることができる。我々が目で見える方向である前がもつ概念が時を示すのに用いられる例であるが、前が包含する概念と時を表す用法への拡張に関しては更なる検討の余地がある。

2) 「先を行く列車」というように訓読みすれば空間的な位置関係を表すこともできるが、出発の順序を考えて発話者が乗っている列車を基準にすれば当該の列車の方が時間的には過去になると解釈するものとする。

## 【謝辞】

言語文化教育学会第 13 回大会での口頭発表の際に、言語文化教育学会理事の中井基博先生、生井健一先生、矢野安剛先生など数多くの先生方に貴重な御助言を頂きましたことに御礼申し上げます。また、大会参加にあたって事務局の深田嘉昭先生をはじめ多くの先生方にお世話になったことに御礼申し上げます。なお、本稿の不備、誤りは全て筆者の責任である。

## 【主要参考文献】

- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. University of Chicago Press. Chicago.
- Lakoff, G. & M. Johnson. (1980) *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press. Chicago.
- Lakoff, G. & M. Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodiment Mind and its Challenge to Western Thought*. Basic Books. New York.
- Langacker, R. (1991) *Foundation of Cognitive Grammar: Descriptive Application*. Stanford University Press. California.
- Talmy, L. (2000) *Toward a Cognitive Semantics vols.1-2*. MIT Press. Cambridge
- 伊藤創 (2008) 「空間から時間へ 概念メタファーの考察ー「先」「前」「後」の分析を通じてー」 『KLS 28』 1-10
- 瀬戸賢一 (1995) 『メタファー思考』 講談社. 東京.
- 鍋島弘治朗(2011) 『日本語のメタファー』 くろしお出版. 東京.
- 真栄城玄太 (2012) 「「さき」の空間的意味についての考察」 『KLS 32』 243-254
- 安井泉 (2010) 『ことばから文化へー文化がことばの中で息を潜めているー』 開拓社. 東京.



# 2013 年度活動記録

## 言語文化教育学会(JATLaC)定例シンポジウム

日時：2013年7月27日（土曜日）午後1時30分～5時30分

場所：早稲田大学早稲田キャンパス22号館5階502教室

テーマ：「大学における基礎力育成の問題点と課題」

コーディネーター・パネリスト：

中井 基博 氏（コーディネーター 当学会理事 東京国際大学）

河住 有希子 氏（当学会理事 日本工業大学）

生井 健一 氏（当学会理事 早稲田大学）

本橋 幸康 氏（当学会理事 埼玉大学）

情報技術の発展に伴い、人と人との関わり方が変わり、情報へのアクセス方法が変わり、概念形成・言語による思考を訓練する機会が少なくなった現代、その影響が様々な形で「問題」として表れている。

断片的な情報があふれかえる時代において、バラバラの情報をつなぎ合わせ、体系化する力を身につけることを目的とした教育方法（学習方法）を検討する必要がある。

今回のシンポジウムでは、大学の初年次教育に代表される基礎力育成のための教育に着目し、大学生の現状、問題点を共有し、参加者と共に解決のための方策を議論。

# 言語文化教育学会 (JATLaC) 第 13 回 大会

2013 年 12 月 14 日 (土) 10 時~18 時 ・ 15 日 (日) 10 時~13 時

会場 : 早稲田大学 早稲田キャンパス 16 号館 4 階 405 教室

後援 : 公益財団法人かめのり財団

使用言語 : 日本語

12 月 14 日 (土)

基 調 講 演 : 10 : 30-12 : 00

當作 靖彦 氏 (カリフォルニア大学サンディエゴ校教授)

「グローバル社会を生き抜くための能力開発—言語文化教育の果たす役割」

今回の来日は、公益財団法人かめのり財団の招聘によるものです。

シ ン ポ ジ ウ ム : 13 : 30-17 : 30

「グローバル人材育成の現状と課題-教育および企業の立場から」

パネリスト :

小川 将明氏 (Innovative Micro Technology Program Manager)

瀧田 義昭氏 (元日本航空)

浜地 道雄氏 (「一般財団法人 グローバル人材開発」顧問)

水鳥 敬満氏 (Goldrush Computing 株式会社代表取締役)

溝口 悦子氏 (都立国際高校)

コーディネーター :

深田 嘉昭 氏 (当学会理事・武蔵野大学他)

12 月 15 日 (日)

個 人 発 表 : 10 : 00-13 : 30

10:00-10:30

・「コーパス調査に基づく補助動詞『しまう』の考察」

中山 富子 (昭和女子大学大学院)

10:30-11:00

・ 「『正解』を求める授業から、『つながり』の実現へ

—必修リーディング・リスニングクラスでの試み。」

大橋 弘顕 (横浜国立大学)

11:00-11:30

・ 「「先」が表す時に関する一考察」

萩原 伸一郎 (フリー)

《発表順》

## 言語文化教育学会設立趣意書

大学における言語教育は、言語学や文学などの専門家の手に委ねられている場合が多い。言語教育そのものを直接の専門とはしない人々が教育の効果をあげるために工夫を重ね、努力してきた。その経験を言語教育の専門家も交えて分かち合い、相互啓発の場を設けた。同時に、今後言語教育に携わる者への研修を兼ねることで、教員養成改革へ一石を投じることにも目的とし、言語文化教育学会（以下、本学会）を設立する。

言語教育は分析的であると同時に総合的な性格をもつ。したがって、学問分野がより専門化し、細分化と深化による分岐が進む時代に、本学会は言語教育という共通の基盤に立ち、教える言語の差異を超えて、異なる分野の専門家に討論と相互啓発の場を提供する。

本学会は、学際的であるだけでなく、「職際的」な性格をもつ開かれた学会を志向する。したがって、言語教育に携わっている人の他に、学習者や社会人も含め、言語教育に関心のあるすべての人に参加を呼びかける。

本学会は、講演会や討論会を開催することによって、専門や立場を異にする参加者が自由に言語教育の諸相を論じ、言語教育への認識を深めることを主な活動とする。内容としては、言語教育における言語と文化の関係を中心に、言語と心理、言語と社会、言語とコミュニケーション、言語と情報などを論じる。

本学会の前身である「早稲田大学言語教育研究会」は1996年より、言語の違いを越えた言語教育者間の知識の共有を目的として、国内外の研究者による講演会を企画・運営してきた。同研究会はその理念を引き継ぐ本学会の設立とともに、発展的に解消する。

## 《学会理事》

- 池田 雅之 (早稲田大学：英語・比較文学/比較基層文化論)  
一森 俊明 (東京大学・元日本航空：フランス語・言語学)  
浮田 三郎 (広島大学：ギリシャ語・言語学)  
岡田 浩平 (早稲田大学名誉教授：ドイツ語・ドイツ文学)  
川口 義一 (早稲田大学：日本語・言語教育)  
河住 有希子 (日本工業大学：日本語・言語教育)  
佐藤 巨呂 (大学書林国際語学センター)  
志野 文乃 (早稲田大学大学院生：英語・英語教育)  
Snowden, Paul (早稲田大学：英語・比較言語学)  
徳永 美暁 (昭和女子大学：日本語・言語学)  
中井 基博 (東京国際大学：英語・英語教育)  
中田 清一 (青山学院大学名誉教授・昭和女子大学  
：英語、日本語・言語学)  
中野 美知子 (早稲田大学：英語・英語教育)  
生井 健一 (早稲田大学：英語・言語学)  
深田 嘉昭 (武蔵野大学他：日本語・言語教育) 事務局  
福田 育弘 (早稲田大学：フランス語・フランス文学)  
藤村 泰司 (国際大学：日本語・日本語学)  
Berendt, Erich (清泉女子大学名誉教授：英語・社会言語学)  
村上 公一 (早稲田大学：中国語・中国語教育学)  
村田 久美子 (早稲田大学：英語・異文化コミュニケーション)  
本橋 幸康 (埼玉大学：国語・国語教育)  
矢野 安剛 (早稲田大学名誉教授：英語・応用言語学)

〈50 音順〉

言語文化教育学会  
(The Japan Association of Teaching Language and Culture)  
会則

第1条：(名称)

本会の名称は言語文化教育学会(JATLaC: The Japan Association of Teaching Language and Culture)とする。以下、本会と記す。

第2条：(目的)

本会は、わが国における言語文化教育の発展と向上に資するための調査・研究を目的とする。

第3条：(事業)

本会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

1. 大会、その他研究集会の開催
2. ニュースレターおよび学会誌の発行、ホームページの運営
3. その他本会の目的を達成するための事業

第4条：(会員)

本会の会員は年齢、職業、身分、性別の一切を問わず、第2条の目的に関心をもつ者で構成され、正会員、学生会員、賛助会員からなる。

1. 正会員
2. 学生会員
3. 賛助会員

第5条：(会費・会計)

会員は会費を納入するものとする。会費の額は理事会が提案し、会員総会において審議、決定する。

会計年度は毎年4月1日から翌年3月31日までとする。

予算案および収支決算書は、会計監査担当の理事が監査し、総会で承認を得る。

第6条：(役員)

本会に会長1名、理事を若干名置く。

1. 理事は会員より選出されるものとする。任期は3年とし、再任を妨げない。
2. 会長は理事の互選により選出され、会務を統括し、本会を代表する。

第7条：(総会・理事会)

本会に総会、理事会を置く。

総会は、正会員、学生会員をもって組織し、原則として年1回、会長が招集する。総会は、本会の議決機関として本会の事業および運営に関する重要事項を審議決定する。また、理事会は必要に応じて臨時総会を開催することができる。

理事会は、会長および理事をもって組織し、第3条に定める事業ならびに収支予算および収支決算に責任を負い、執行の任に当たる。

第8条：(事務局)

本会は、事務局を早稲田大学内に置く。

第9条：(改正)

会則は、総会出席者の3分の2以上の同意を得て改正することができる。

付則：この会則は、2001年10月27日の本会第1回大会の総会において制定し、その日より発効する。

## 言語文化教育学会のご案内

当学会は2001年10月27日の会員総会において、正式に発足いたしました。

本学会の特徴として、第1は、日本語であれ、英語であれ、フランス語であれ、中国語であれ、教え、学ぶ言語文化の種類を問わず、言語教育・学習に携わる者、あるいは関心をもつ者が集まって相互に啓蒙しあい、意識を高め、言語教育の改善に向けて発言していくという「横断性」。第2は、文学、言語学、社会学など様々な分野の専門家がそれぞれの立場から意見を出しあい、議論し、学びあう「学際性」。第3は、学生とか、主婦とか、退職者とかの身分や教員とか企業人とか自由業者などの職種を問わない集団が様々な、異なる立場から言語教育を語りあう「職際性」。最後に、人種・民族や障害の有無を越えて、手話や点字や自閉症者のコミュニケーション補助言語など、障害者のコミュニケーション補助なども含めた言語教育を語っていく「異際性」が挙げられます。

本学会は、言語文化教育に関心をもつ人々が異なる立場から異なる意見をもちより、自由に議論し、言語文化教育に対する意識を高めあい、啓発しあい、後進の指導にあたることを目指しております。

言語文化教育にご興味をお持ちの多くのかたのご参加をお待ちしております。

言語文化教育学会 会長 矢野 安剛

## 言語文化教育学会入会案内

本学会は言語教育に携わっている方だけでなく、社会人や学習者など、言語教育に関心を持つすべての人に参加を呼びかけております。したがって、本学会には、本学会の趣旨に賛同なさる方でしたら、どなたでも入会いただけます。

入会を御希望の方は、入会申込書、会員登録用紙に必要事項を御記入のうえご提出ください。なお、本学会の連絡は、原則として電子メールでいたしますので、メールアドレスの御記入をお忘れなく。また、会費は、原則として学会の口座へ振り込んでいただきます（申し訳ありませんが、手数料は個人負担とさせていただきます）。

|      |      |          |
|------|------|----------|
| 〔会費〕 | 正会員  | ：5000 円  |
|      | 学生会員 | ：3000 円  |
|      | 賛助会員 | ：20000 円 |

《学会預金口座》：東京三菱銀行江戸川橋支店  
普通預金 1017574 言語文化教育学会

提出先住所（郵送の場合）：〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1

早稲田大学教育総合学術院 福田育弘研究室内 言語文化教育学会事務局

提出先（スキャナー取り込みファイル添付の場合）[jatlac@gol.com](mailto:jatlac@gol.com)

- ・ 入会関係書類発送、送金の際には、事務局宛、メールで必ずご連絡ください。
- ・ 入会に入会申込用紙、会員登録用紙の提出、および会費の納入をもって完了するものといたします。折り返し事務局より手続き完了のご連絡をいたします。
- ・ 振り込みの明細書をもって、領収書とさせていただきますが、学会発行の領収書が必要な方は事務局までお申し出ください。
- ・ 学生会員の入会申込、更新にあたっては、学生証のコピーなど学生であることが確認できる書類を提出していただきます。学籍を確認できない場合は、正会員扱いとなりますので、ご了承ください。

問い合わせ先：言語文化教育学会事務局（[jatlac@gol.com](mailto:jatlac@gol.com)）

## 〔学会より〕

- ・ 学会誌のオンライン版がご覧いただけます。

学会誌のオンライン版を、学会ホームページに掲載いたします。特別号も掲載されておりますので、ご参照ください。

《オンライン版》ISSN 2186-6201

(URL: <http://www.waseda.jp/assoc-JATLaC/index.htm>)

- ・ 2014年6月より以下の要領で第14回大会個人発表の受付をいたします。

### 言語文化教育学会大会個人発表 申し込み要領

- ・ 発表者は本学会会員、もしくは会員の推薦を受けたものとする。発表者を推薦する学会員は、その発表者にかわり、学会へ発表の申し込みを行い、発表当日は紹介者として、その発表の司会進行を行う。
- ・ 発表内容は、言語文化教育に関するもので、未発表の内容に限る。
- ・ 発表、資料、発表概要とも、使用言語は日本語とする。
- ・ 発表の時間は、質疑応答も含め一人30分程度とする。
- ・ 発表を希望するものは、8月末までに1000字程度の発表概要と共に、事務局宛に発表を申し込むこと。発表概要は、メールの添付書類で送付するものとする。提出ファイルの形式は、ワード、テキスト、pdfファイルのいずれかとする。
- ・ 理事会は発表の内容を審査し、9月下旬までに事務局より採否を通知する
- ・ 審査に通り、発表が決定した者は、10月下旬（期日は後日確定の上ご連絡します）までに、予稿集原稿を事務局宛添付ファイルで送ること
- ・ 口頭発表を行った者は、学会誌および学会誌オンライン版向けに発表を報告する文章（A4、4枚程度）を、翌年1月末までに提出しなければならない。
  - 体裁：全角40字40行、MS明朝11ポイント、英文の場合、Times、11ポイント（英語以外の外国語の例文等を掲載する場合は、この限りではないが、ポイントは11ポイントとする）四方に20ミリずつの余白を取る
  - 白黒に限る
  - 原則として、マイクロソフトワードのdocもしくはdocxファイルと、pdf.ファイルの両方で提出

## ・ 学会誌第 9 号論文募集

以下の要領で、学会誌第 9 号の論文を公募致します。多数の方のご応募をお待ち致しております。

- ◇ 論文を応募する者は、言語文化教育学会の会員であること。
- ◇ 論文の内容は、言語教育に関するものであること。
- ◇ 未発表のものに限る。
- ◇ 論文執筆の為の使用言語は、原則として日本語とする。
- ◇ 論文の体裁は以下のように統一すること。
  - 長さ：資料・参考文献を含めて 15 枚以下
  - 体裁：全角 40 字 40 行、MS 明朝 11 ポイント、英文の場合、Times、11 ポイント（英語以外の外国語の例文等を掲載する場合は、この限りではないが、ポイントは 11 ポイントとする）四方に 20 ミリずつの余白を取ること
  - 白黒に限る
  - 原則として、マイクロソフトワードの doc もしくは docx ファイルと、pdf.ファイルの両方で提出
- ◇ 締め切り：2014 年 11 月末
- ◇ 学会は、提出された論文に関して審査し、2013 年 12 月中に応募者に採否を連絡する。

- ・当学会に対するご意見、ご要望等は、学会事務局宛 E-mail でお知らせください。
- ・学会企画に関するお問い合わせも、事務局まで、E-mail にてお願いいたします。

## 言語文化教育学会事務局

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1

早稲田大学教育総合学術院 福田育弘研究室内

E-mail : [jatlac@gol.com](mailto:jatlac@gol.com)

ホームページ : <http://www.waseda.jp/assoc-JATLaC/>

言語文化教育 通巻第 8 号

ISSN 2186-6198

《オンライン版》ISSN 2186-6201

(URL: <http://www.waseda.jp/assoc-JATLaC/index.htm>)

JATLaC Journal No. 8

2013 年 3 月 30 日発行

発行者：言語文化教育学会 代表者：矢野安剛

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1

早稲田大学教育総合学術院 福田育弘研究室内

E-mail: [jatlac@gol.com](mailto:jatlac@gol.com)

HP: <http://www.waseda.jp/assoc-JATLaC/>

